

交樂莊人形繪稿
十月本稿興行



交樂莊 國の橋

乍憚口上

秋の千草も咲き亂れやう／＼涼しさは加りよろしき季節と相成申候處市中皆々様には愈々御清榮に遊ばされ大慶此事に奉存候従つて當座に於ては秋季劈頭に於ける本格興行として文樂座太夫三味線人形連中巨頭精鋭久々の顔ぞろひにて又永らく休演中の鶴澤友次郎鶴澤清六竹本部太夫も共に御目見得仕り茲に花々しく同心協力いたし銃後奉公の熱意を以て相勤むべく狂言も又當座秘藏の名番組を整へ絢爛豪華の郷土繪卷をくりひろぐる次第に御座候幸ひに絶好の御鑑賞季節とも相成申候まゝ何卒古典愛好の精神を以て相變らず當座御引立の上開場の曉は陸續御來觀被成下度偏に奉御願申上候

昭和十四年十月一日

四ッ橋 文樂座 敬白

昭和十四年十月一日初日

初日午後二時開演
毎日午後三時開演

・御觀覽料・

- 一等席 御一名 金三圓
(一階座席五十錢上り)
- 二等席 御一名 金一圓二十錢
- 三等席 御一名 金五十錢
(外に各等入場税一割)

一等御座席(一等椅子席)は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南[㊦]四七壹壹番
專用電話 南[㊦]三〇三二番
一般御用 南[㊦]三七八八番
の電話

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ります。

菊池 寛先生原作
食満南北脚色

恩讐の彼方に就て

食満南北

この新作淨瑠璃の物語は國定教科書にも出てゐますので、却つて學生諸君はよく御存知の事ですし、又耶馬溪を見物に行かれた方もかの地の青の洞門の物語は親しく聞かれた事と思ひますが、今日この淨瑠璃にあらはれた處だけでは鳥渡この洞門へくるまでの筋が解りにくいと思ひますので申上げて置きませう。事は安永から延享へかけての事實物語を脚色したもので、江戸の淺草田原町の中川三郎兵衛といふ五十有餘才の旗本の侍が其愛妾お弓の色香に溺れてゐたのに附込んでお弓が其仲間の市九郎と共謀し

て中川を討つて立退くのでした。其時まだ四五歳の中川の一子實之助が成長してこの話を聞いて敵討に旅立ちます。一方お弓と市九郎は轉々してお弓に教唆され強盜などをはたらき、とう／＼市九郎は其あまりにも醜悪なお弓を捨て懺悔の生活に立入り僧となつて聊の善根を植へつゝ諸國を遍歴してゐるうちこの樋田の岩國川へたどりつき、さうして鎖渡しの難處の話を聞いて、岩石をくりぬき人を通さうといふ大願を立てたのです。郷土の人に嗤はれるのもかまはず十年二十年終には處の人も其熱心に動かされて大ひに市九郎今の名は了海上人を助けたのです。ある日諸國を敵のありかをたづねてそれからそれとめぐりあるいた中川實之助がはからずこの了海に出逢つて、こゝにこの一段にあらはれるやうな事件が起こつてくるのでした。以下は舞臺と床とからそのすべてをお傳へ致しますせう。

☆うせまし廢全を品製金☆



國民精神總動員

盡忠報國

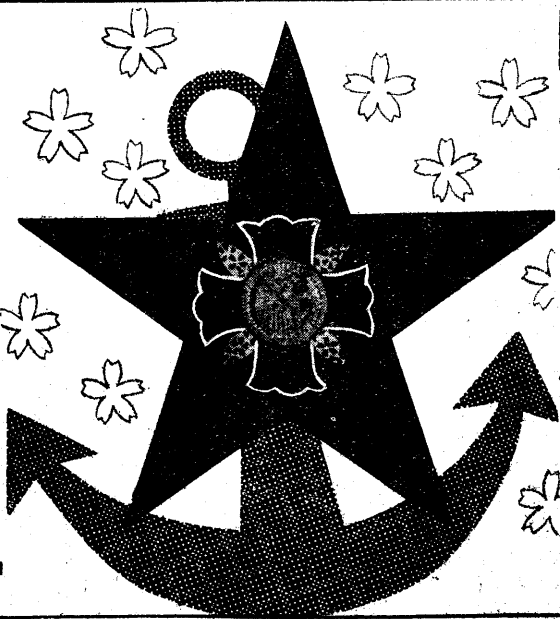
舉國一致

堅忍持久



國を護つた傷兵護れ

傷兵保護院
國民精神總動員中央聯盟



文樂座人形淨瑠璃

十月本 格興行

十月一日初日 初日午後二時開演
 毎日午後三時開演

鬼一法眼三略卷
きいち ほうげんさんりやくのまき
五條橋の段

三時二時より
(幕間 五分)

梅野 迎駕野中の井戸
うめの むかへかごのなか
桑樂町の段

三時二十五分より
四時〇五分まで
 (幕間 十分)

恩讐の彼方に
おん しゅう 善池 寛原作 竹本 橋太夫作曲
 食通 南 北脚色 かなた

四時十五分より
四時五十分まで
 (幕間 十五分)

紙子仕立両面鑑
かみ こじ たりりようめんかざみ
大文字屋の段

五時十分より
六時三十分まで
 (幕間 十五分)

近頃河原の達引
おしげん ちかごろかはら たいひき
堀川 登壇しの段

六時四十五分より
八時三十分まで
 (幕間 十分)

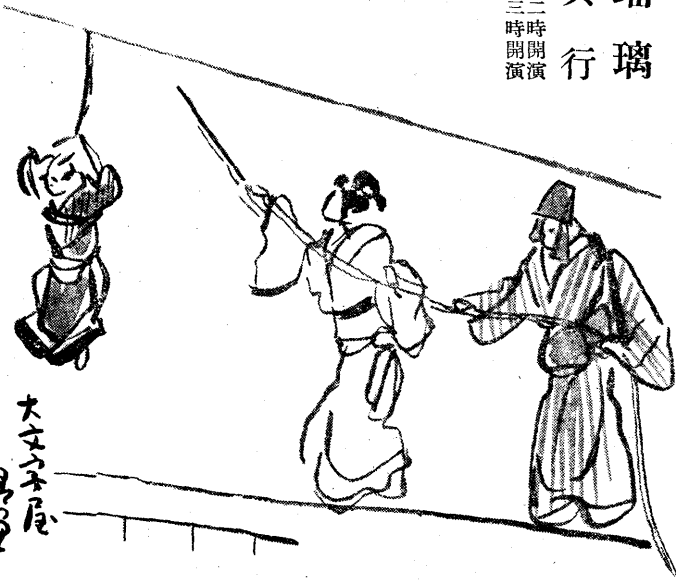
本朝廿四孝
ほん てる にじゅうし こう
十種番の段

八時四十五分より
九時五十分まで
 (幕間 十分)

妹背山婦女庭訓
いも せ やま せん な てい きん
狐火の段

十時三十分より
(打出 十分)

流行戀の小田巻



大文字屋
 昌吉

辨

慶

竹本文字太夫

ツ

竹本常子太夫

レ

竹本隅若太夫

豊竹駒若太夫

豊竹松島太夫

野澤吉左

豊澤新太郎

鶴澤清友

人形

牛

若

丸

桐竹紋十郎

武藏坊辨慶

吉田玉幸

行ちがひさまに薙刀の柄をはつしと
 蹴上ればスハクせ者よ物見せんと薙
 刀柄ながく追取のべ切てかゝれば若
 君は薄衣取のけ打寄す。つるぎをあ
 ざむく傘は六十間の橋の上、ひらり
 〳〵〳〵〳〵車にもまるゝ牛若
 丸辨慶いらつて早足をふみ遁さじも
 のと切込を丁と受たる勢ひは雨をお
 こせる蛇の目の傘風ふきはらへば飛
 かはしひらりと抜たる小太刀のかげ
 星のひかりと水車所は名におふ加茂
 川の流に立波どう〳〵〳〵と寄
 すれば白鷺のあしべにあさる片足立
 すがたはつくばね羽子板の拍子はき
 ぬたの音むそふ返しうつゝの太刀二
 つの鏝音から〳〵〳〵らんかん傳ふ
 さゝがにの蜘蛛のふるまひ木づたふ
 ましら水の月かや手にたまらぬすが
 たをしたふ薙刀のゑたりやおふとし
 つかと取りゑいやと引けばゑいと引

く橋の擬寶珠玉の汗鎬を削りて戦ひ
 ける辨慶秘術を盡せ共終に薙刀打落
 され組んとすれば切はらふ縋らんと
 するに便りなく詮方盡て橋桁を二三
 間とびしさり呆れ果て立たりける此
 辨慶に大汗かゝす汝は何者ホ、我こ
 れは源の牛若丸シタリ道理で大抵の
 人でないと思ふた今より後は御家來
 コレ可愛がつて下さんせと頭を橋に
 ぞ付けにける主従三世の縁の綱約束
 長き五條のはし橋辨慶と末の世に語
 傳へて繪にも書き祇園祭の山鉾にも
 祝飾るぞめでたけれ。



48

梅野 むかへこのなか
由兵衛 むど
迎駕野中の井戸

聚樂町の段

聚樂町の段

切

豊竹駒太夫
鶴澤清二郎

人形

女房 小梅 吉田小兵吉
丁稚 長吉 吉田文二郎
由兵衛 桐竹政龜

この淨瑠璃は、元文三年十月大阪豊竹座で上場した「茜染野中隠井」聚樂町の段、俗に長吉殺しで、作者は原田由良之助添削者並木宗輔である大體の筋は、西國の藩士であつた梅の由兵衛が舊主が紛失した寶刀を購ふために百兩の金子に困つて、女房小梅の弟である長吉が、七十兩の金子を持つて泊つたのを幸ひに、女房を酒買ひに出した留守中に長吉を殺して金を奪ふと、長吉は初めから死を賭して由兵衛夫婦を救ふために訪ねたのだと本心を明かすといふのである。

(床本) 聚樂町の段

飛ばして急ぎ行く。跡に女房が胸は板。情なや彼の刀、外へやつては夫が立たず、とは云へ急に金はなし、今日に限つて由兵衛殿、戻りの遅やと門へ馳出で、立歸りては及ばずも思案しがくの金事は、胸も心も一時に、裂けるより猶辛かりし。はや入相の鎖故に、命取らるゝ長吉は、夏の虫かや燈火を、點す時分に來懸りて。詞 姉様お内にござるかと、立入る弟は邪魔ながら、素氣無う云はれず惚々と、詞 オ、長吉ようおじやつたの、何時見えても愛想も無し、布子の裏も染め置いた、近い内に仕立てやらう。如才でない忙がしさと、斷り云へば長吉は、姉の顔を打眺め詞 お前はいかう瘦が來た、心持でも悪いのか、但しは何ぞ苦になるか、煩ふてばし下さんすなど、云へば小

梅は打惚れ、詞オ、姉弟とて能う問ふてたもる。此中其方にも話した大切な刀、金渡さねば手に入らず、外へやつては一分立たぬと、主も私もいかい辛苦、是を思へばお主程、世に大切なものはない詞コレ長吉云ふ迄は無けれども、随分と奉公大事、親方の物塵一本、粗末にせまい違へまいと、心願懸け勤めてたもや。お使の戻りなら、早う去んでお返事いやと、意見と共に去なし懸け、弟所へいかぬ苦を、又も案じて居たりける。詞イエ、私は書から平野へ爲替の金受取に行つて、日が暮れたら爰にでも又先にでも泊つて來いと、番頭の駄付、即ち金もこれ爰にと、首にかけたたる小財布を、どつかり下せば小梅は恟り。詞ヨウ、そして其金は板金か、マア何程有る。アイ、小判で七十兩。ム、何ア

其ノ金が小判で七十兩。テモマア澤山有るの、有る所には有り餘り、子供其方に持ち歩かせ、何とも思はぬ身代に、半時でも成つてみたい。詞コレ人が見たらつい取るぞや、大事に首に懸けて居や、書から出たら空腹からう。ドレ茶を入れて飯おまそと、立たんとすれば。詞イヤ私が沸かして食べまする、茶の在る所も知つて居ると、かい立つて釜の下、焚きに行く影、後影、見送る姉は、彼の金をならばせめて半分の主はどうして遅いぞと、見るや表へうとくと、一荷の桶に明礬の、筒や箒を看板に、我門までも、詞梅やしむ茜、金の才覺がてらには、日暮れて道は急がしく、戻るや否や、詞コレ由兵衛殿、急な事、今日留守の間へ勝次郎様がお出でなされ、明日中に刀を請ける人があると質屋

の噓、夫れをお前に知らさうといふて、來てじやあつたわいの、と聞くより恟り由兵衛。詞ナ、なんとそれ請けさしてたまるものか。そして勝次郎様は。サアお吉にも此譯話すと蜷川へ行かしやんした。エ、新地へござつてからが埒の明かぬ事、又お吉様が苦になされう、明日といふては今夜一トよさ、大まいの金の才覺ハテ何うしたら宜からうと、手を拱ねいてさし俯向き、思案途方にくれ居たる。女房おろく、傍により。詞わしがさし出た事ながら、元アノ刀は盗み物、此大阪で質に置いた、その置き主を吟味して、お上の沙汰にするならば、當分は金入らず、手に入る事もあらうかと、氣を付くれれば打ち首背き。詞成程女子氣でさう思ふは尤も、元この質札の手に入つた時、置主は一六屋の本八と、古手屋

の三婦と書いてある故、何でも捕へて一と詮議とは思ふたれど、よもや三ぶめが國へ入込み、あの刀盗んで來まい。こりや中に最一人盗み手があるに極つた、が爰で物が露顯しては、その盗人が風をくらひ詮議の筋を失ふは道理。マア百兩金を拵へ、大切な刀こつちの手へ請戻せば、此の詮議はいつでもなる事。が何を言ふても百兩の金が無ければ、詰まらぬ身の上。知れにくい刀のありかはお吉様と勝次郎様が詮議なさるゝ。せめて金の才覺して、刀をおれが請戻さねば、コリヤ女房、此由兵衛が忠義が立たぬわい。忠義が立たねば腹切つて死ぬる分は安けれどな、あの刀が手に入らねば、大事の主人の家は斷絶。それが無念な女房と、語れば共に涙ぐみ。さう有れば尤も、わしも思はぬ罪作り、詞 最前長吉が爲替

の金七十兩受取つて來ましたと、見せた時のその欲しさ。何といやる、アノ長吉が七十兩、金持つて來た、さうしてもう行んだか。イエ〜道の用心を思ひ、今夜は此處に泊つて居ます。ム、オ、そりやよう泊めやつた、よい思案。分けて此中は物騒な、明日疾うから行んだが、まし〜、イヤ扱と、何しよかい、今夜はマアとつくり思案して、是非とも出來ずば質屋へ渡り、我身がいやる通りせうかい、オ、夫れが上分別、一寸延びれば尋のびる、案じて濟まぬは金事と、了簡付くるも夫の氣休め。由兵衛も打とけ顔。詞 何と女房十文存んで寢よかい。オ、ほんにいつそ夫れも宜からう、ドレ〜買うて來ませうと、何心なく立出しが立止り。詞 コレこちの人、刀の金は百兩じやの。ハテ知れた事、夫れを尋

ねて何にする。サア、もし道に落ちてあつたら、そのうち百兩拾ふて戻るぞへ、待つて居いゑと言ひ紛らし、聚樂の町の横町とぼ〜と、酒屋の、かたへたどり行く。あとには心一決の、由兵衛は門の口、鏝掛けて押入の、脇差そつと懐へ、隠して勝手をさし覗き。詞 オ、長吉々々來てか、此中は會はなんだが、變る事もなかつたか。サアまあこちへと猫撫での、聲に引かれて、詞 オ、今お戻りなされましたか、姉さまどこへと立出づる。ア、イヤ女房は使ひにやつた、ガマ爰へ〜と片脇へ連れ行き。詞 コレ長吉、今のは有るか。今のとはへ。ハテ小判は懐にあるかといふ事。ソリヤソレ親方のもの大事にかけたが宜いぞやと、いふにさすがは年足らず、懐の財布取出だし。詞 金は爰に七十兩、首にかけ

て居りますと、見せたが因果そゝ髮の立つ程ほしく、女房の歸らぬ内と脇差に、手をかけてはちやつと引き抜きかけては押しかくし、心は早鐘時の鐘、初夜か半時か半亂の、刃も共に亂れ焼き、抜き放したる折からに。女房小梅が門の戸を、叩いてわしぢや爰明けてと、いふはたしかに姉の聲。待たんせ開けると長吉が、立つて行く後から、急ぎに急いたる三刀四刀、うんとにつけに反る音。胸にこたへて門の戸を、引きしやなぐれば鏝はづれ、明いた口さへふさぐ間の、ないにうろたへ由兵衛は、有合ふ染物手負に冠せ。詞オ、女房ども、サ、酒買うておじやつたか早かつたのと、齒の根も合はね風情なり。詞ホ遅いか早いか知らねどもサア、一つまぬれと茶碗さし出し受ける人も注ぐ人も、共に慄ふて傾

くる、徳利の口からばらばらと、出づるは一步茶碗に一杯。さすがの由兵衛恟り仰天。詞女戻ども此金は。アイ、百兩に足らぬ七十兩、足さうと思ふて筋向ひの肝煎殿の所へ往て島の内の木幡屋へ、勤め奉公する筈で、マア證文はあと廻し、わしが心を吞込んで、取代へてもらふたその金はナ、一步で丁度三十兩。ム、そんなら勤めしてくれるか。コレ由兵衛殿、長吉はまう死に切つたか、息があるなら逢はせてと、わつとばかに泣き出だす。詞コリヤ聲が高い近所へ聞えるわい。小の虫を殺し、大恩報ずる今宵の仕誼、刀さへ取り戻さば弟の敵存分にならう女房と、事を分け理を分けし、言葉に女房涙を押さへ。詞エ、それや聞えませぬ由兵衛殿、お前を存分にする氣なら、わしまで勤めに行きはせぬと

わいな、お前の爲に御主人なれば、わしが爲にも御主人様。その大事に及んだ今宵、わしさへ欲しやと思ふた金、取るは無理とは思はねど、殺してまでとは由兵衛殿、せめて死目に會ひたいと、かけ寄つて抱き起し詞コレ、長吉、姉じや、小梅じや、わいの。嗚わしども憎かるが、コレ爰をよう聞いてたも。最前話した刀の事、外の手へ渡すとの、お國のお主御一家中は、どうおなりなされうやら、そなたが死んで此金が、御用に立つとの、幾人ともなる命助かり、佛も及ばぬ、コレ慈悲なるぞや。それをせめての心ゆかしに詞コレお念佛申したもと、すゝめ歎けば目を開き。詞姉様わしは切られいでも、死なねばならぬ事があるム、何と言やる、死なねばならぬ事があるとは、そりや何故にや。され

ばいの、此中來た時段々の話、瘦るも金故貧ゆゑと、聞いた時のその悲しさ、何うぞと思ふ心から、わしや此金は盗んで來たのじやわいの。ヤア、來ると進じようと思ふたが親方の物塵一本、粗末にすなどの御意見、何うもやらうと得言はいで見せびらかしてをりましたの。たつた一人の姉様、なんぼ程孝行にしても仕飽きはなけれど、丁稚の内は自由ならず、盗んでなりと苦を助け、跡ですぐに身を投げて、最後は小初瀬オハセの野中の井戸と、わしや來しなに、死ぬる所まで見て來たわいのと、縄り付きしやくり上げたる有様に、小梅は身も世もあらばこそ。 詞コレ

ば聞く程むごらしい。二た親に別れてより、そなたもわしも難行苦行、マア是程で年が明く、年がいくつと指を折り、數へて待つた此姉が、連れ添ふ夫が殺すとは、世界の因果が固まつて、夫婦となり、兄弟とも、生れて來たかと身をもだえ、泣きくどくこそ道理なる。 由兵衛は長吉が志を聞くにつけ、胸に盤石押さるゝ心地。涙かくして、コリヤ長吉。 詞 斯うなる事も因縁づく、追付け繩目の恥を受け、跡よりつゞく此身體禮は冥土でゆるりと言はうと、せまりし一句に臨終の長吉。 詞コレ 由兵衛様、たよりのない姉様の事、たのみますると懐の、金投げ出して落入れば、わつと泣き出す小梅を押へ。 詞 コリヤ女房、その泣く聲が外へ洩れては、むごい目見た甲斐が無いがや。どうぞ死骸を隠したいと、言ふ

に是非なく涙をおさへ。 詞 我と我が手に死場所を、見て來たといふたが遺言、野中の井戸へ葬つて下さんせわしも共々野邊送り。それから直ぐに此梅は、鳥の内の木幡屋へ、苦界三年うき勤め、憂は重なる浮世ぞとまたも思ひに胸ふさがる。押入開けて取出だす、けつこはつこの下帷子、此の子に着しよとて買ひ置いたが、經帷子になつたかと、涙ながらに着せ代へる。水弾はずきにと由兵衛が澁紙出して上包み。湯桶の代り澁桶の、蓋はなくとも二人して、擔うて行くが葬禮の、志ぞとかゝへ入れ、斯うならうとは知らずして、姉さまわしは此暮に、角を入れたら大人役モウお前の苦にならぬと、嬉しがるのを聞くにつけ、來る正月の藪入りには、おとなしい顔見よものと、思ふた事言ふた事、夢になつたか悲し

やと、もだえこがれて泣き沈む。夫もむせぶ聲涙。詞かゝる因果な姉聲持ち、あえない最後遂ぐるとも、知らず由兵衛が身にせまる、切ない事を聞きかねて、救ふ心で見せた金、ほんの喩への餓鬼に水、あんまりほしさの出来心。コリヤ救してくれよと身を寄せて、ゆすり動かしくどき言、いづれ盡きせぬ歎きなり。女心にいと猶、小梅は思ひ亂るれど、夫が願ひお二人の、御恩報ずる御奉公。詞お主の爲、夫の爲、弟一人にかへはせぬ、返らぬ事を免やかうと言ふ間にもしも夜が明けては、長吉が心もむそく迷ひの種。私も泣くまいお前もと、諫められても立ち兼ねる。夫を先へ押立て、我が歎きの後影。相の山見するつらさに後肩を合かき亂したるもつれ足、あゆむは野中死出の道。南無阿彌陀佛々々々

々々々。小梅も梅の花ちらし、やがて茜のしるべまで、回向する身と白玉の、露と消え行く弟を、頼むは彌陀の極樂や、聚樂町の夜の露、消えなん身こそ、三重びん便なけれ。



新 舊 大 合 同 劇

十月一日初日

毎日ヒル正午二回開演
 ヨル五時半

第一 新女性問答 十場
齋藤良輔作 大塚克三監置
 中井泰孝劇化

第二 父と母 二場
永田菊吉作 大塚克三監置
 高屋貞澄演出

第三 研辰の討たれ 五場
木村錦花作 大塚克三監置
 早瀬直演出

御観劇料
 一等席 一圓八十錢
 二等席 八十錢
 平土間 五十錢
 椅子席 (他に各等入場統一圓)

どうとんぼり
 角座

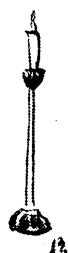
菊池 寛先生原作
食満 南北脚色

恩讐の彼方に就て

食満 南北

この新作淨瑠璃の物語は國定教科書にも出てゐますので、却つて學生諸君はよく御存知の事ですし、又耶馬溪を見物に行かれた方もかの地の青の洞門の物語は親しく聞かれた事と思ひますが、今日この淨瑠璃にあらはれた處だけでは烏渡この洞門へくるまでの筋が解りにくいと思ひますので申上げて置きませう。事は安永から延享へかけての事實物語を脚色したもので、江戸の淺草田原町の中川三郎兵衛といふ五十有餘才の旗本の侍が其愛妾お弓の色香に溺れてゐたのに附込んでお弓が其仲間の市九郎と共謀し

て中川を討つて立退くのでした。其時まだ四五歳の中川の一子實之助が成長してこの話を聞いて敵討に旅立ちます。一方お弓と市九郎は轉々してお弓に教唆され強盜などをはたらき、とう／＼市九郎は其あまりにも醜惡なお弓を捨て懺悔の生活に立入り僧となつて聊の善根を植へつゝ諸國を遍歴してゐるうちこの桶田の岩國川へたどりつき、さうして鎖渡しの難處の話聞いて、岩石をくりぬき人を通さうといふ大願を立てたのです。郷土の人に嗤はれるのもかまはず十年二十年終には處の人も其熱心に動かされて大ひに市九郎今の名は了海上人を助けたのです。ある日諸國を敵のありかをたづねてそれからそれとめぐりあるいた中川實之助がはからずこの了海に出逢つて、こゝにこの一段にあらはれるやうな事件が起こつてくるのでした。以下は舞臺と床とからそのすべてをお傳へ致しますせう。



食満 寛原作 竹本織太夫作曲
食満南北脚色 竹澤團六作曲
おんしゆう かなた

恩讐の彼方に

青の洞門の段

青の洞門の段

了 海 竹本相生太夫

實 之 助 竹本相生太夫

石 工 房 竹本長尾太夫

同 女 房 豊竹竹太夫

鶴澤道 鶴澤團六

野澤吉 野澤勝

鶴澤網 延芳季

人形

了 海 吉田榮三

石工 惣兵衛 吉田玉市

女房 おみよ 吉田文之助

中川 實之助 桐竹紋十郎

(床本) 青の洞門の段

本曲は所謂新作淨瑠璃で、菊池寛氏が洛陽の紙價を高めた一代の名作「恩讐の彼方に」の中、青の洞門の件りを食満南北氏が改訂脚色し、淨曲界の新人竹本織太夫、竹澤團六の協力により淨曲化の完成を見たもの。新作淨瑠璃の人形劇化の呼聲、文樂座に高い折柄、輿望に應へるべくこゝに敢然脚光を浴びることになつたものである。

實相眞如の日輪は生死の長夜を照却し本有常住の月輪は煩惱の迷夢を燦破す頃は延享二年秋ふかく九國の西北山國川鎖渡しの難所をば救はん

爲の誓願はただ一介の旅の僧植田の山路の岩石をくりぬき人を通さむと星霜爰に二十餘年、慈念も深き洞窟に肉は落ちて骨あらわれ脚はたゞれて削づるが如く白髮のびて頬はあせ此世の人共思われずはぐむ者は所の石工夫婦立寄りまめくしく了海様モウお食事はすみましたか明けてもくれても此洞窟に山國七郷の爲め岩をくだき石を掘り二十年此方の御苦勞畫のうちには我等も手傳ひお仕事を助けてはおりますが夜はお上人様只お一人ア、有難い事ござりますそれでは又明朝お食事を持つて参りませうと立上るを女房引とめ、ア、またしやんせコレ大事な事を忘れてか今日はこなたと二人して爰にゐねばならぬぞへ、ヲ、く、そうじやく、晝來た中川實之助とやらいふ若いお侍お上人様を親の敵と無法にも

斬付けたが石工百姓皆寄つて此のく
りぬきの大仕事成就の日迄と命乞ひ
得心しては歸つたがコリヤ今夜はう
かつに歸られぬわいと腰をおろせば
了海は、御志忝ふはござれども誠は
彼の中川實之助殿の父御を討つて立
退きし此の了海罪業消滅の爲め二十
年以前此の大願を立て申したが洞窟
も大方九分通りはぬけたでござらう
くりぬき成就の日こそ此の市九郎孝
子の爲めに討れる時ハ、ハ、ハ、ハ、
實之助殿は武士ぢや晝間の約束破ら
るゝ人ではござらぬ安心してお歸り
下され、ほんにそうおつしやれば頼
もしそうなお侍成程出しぬきもなさ
れまい、ではお上人様御免なさりま
せと二人は立つて、歸り行く、見送る
こなたは鐵槌を又取上げて打おろす
眞觀清淨觀廣大智慧悲觀及慈觀唱
ふる經文念破觀音人か佛か一念はた

ど打つ槌にこもりけり、折しも忍び
よるの月其光りさへとどかぬ洞窟闇
にも光る一刀は父三郎兵衛を討つて
立のく市九郎打もらしたる無念の形
相大地をほふて近づけば、猶一心に
是故須常念、念々勿生疑、觀世音清
淨、於苦惱死厄、能爲作依怙、はや
りにはやりし實之助おろしかねたる
一刀を鞘に納めて立退くこなた、何
故お斬りなされませぬ實之助殿暫ら
くくくと傍近くいざり寄り、晝間の
仕宜は嘸御無念におぼしつらん二十
餘年以前淺草のお郎にてお父君を殺
害、所を立退きあまつさへ非道を重
ねし市九郎、今日計らずも尋ね來ら
れし其砌り敵と名乗つていさぎよふ
お身様の手にかゝらんと覺悟決めし
折も折、此の洞窟をくりぬきの石工
共にへだてられ心ならずも命のばわ
り一ツ時の息の内一寸なりと五分な

りと掘ふかめくりぬくが此の身のつ
とめ、我大願よし念願は達せず其後
は山國七郷の民の手にても成就せん
年頃の積惡罪業消滅討つて無念を晴
らしてたべ南無念破觀音と合掌の姿
はさながら積徳の大人上の光明に、
實之助打しほれ、了海とやら此の上
はいさぎよく此のくりぬき成就の日
を相またうぞ敵を眼前に控えながら
武士たる者が手をむなしふする無念
さに晝間一時は助けようと石工共へ
の約束を反古に致して忍びしが、其
方が一心精進の尊き姿のけだかさ
に願志の炎も打消され高德の聖りに對
し忍び寄る夜盜にひとしき我身こそ
ア、淺ましやかく敵同志となるも宿
世の約束拙者とても只此の地に止ま
つて其方達の働くを見るよりも及ば
ずながら槌を取り、山國七郷の民の
爲め一ト片ケ二片ケの岩なりとも削

り取つて得さそうぞ其方が本懐の達する日は取りも直さず我等の望みもとぐる目ぞと、情けの言葉に、何とおつしやる極重悪人の拙僧に大願成就の月日をば與へ給はる其の上にあなな様の御助力は百萬の味方より尙頼もしゆうござりまする、若様了海敵同志が肩をならべ多くの人の命の爲め合只打つ音は民の爲め身を粉にくだき石くだきそも延享の二年よりあかずたゆまず兩人は槌にあけ槌にくれ丁々々、ハツシと打てばカツと掘り、早一ト年も夢の間と早くも過ぎて、了海殿くハツ聞ゆるか

も有ればこそもしもの事が有るならば身の無念は兎も角も若様に申譯のたゝぬ仕宜、ア、岩よ此の一念に微塵となれと烈しく下るす鐵槌にアツ如何なされたく、ム、事の外にもろい岩で力餘つて拳し迄が貫き申した、ヲ、不思議な穴が開き申したぞム、不思議じや風が通ふわ、何風が通ふとは、エ、イヲ、崩れるく快く崩れるぞ、ア、風が通ふくさてはくりぬきさせたか、實之助様とくと御覽なされいア、正しく大願成就なるぞ、ヲ、ほのかに光りが見ゆる闇の中にかすかに光るは山國川の流れに相違ない、見える聞える川の流れア、まぎれもない街道岩がぬけた道が開らけたヲ、く二十餘年の念願が届いた有難いく忝けない、實之助様、了海殿、月影もれし岩穴に互ひに手と手を取りかわし本願成就

の喜びはたとへん方も泣く涙、かの函谷の關の扉も開けし昔眼のあたり嬉し涙ぞ道理なり、了海かたち改めて大願成就の上からは孝子の望みもとげさせいで此の功も空しくならう、今宵こそ約束の日。了海奴もかゝる法悦のうちに往生致すなれば未來は淨土に生るゝ事疑ひなしイザと覺悟の座をくめば、實之助すり寄つて二十餘年の艱難辛苦御坊の大業に比らべては敵きを討つ討たぬなどは淺ましい、人間の世の業ヲ、ア、アレ見られよアノ月の光りが御坊には即身成佛の御光の様に輝き申す、此實之助に取つても妄執を晴らす眞如の光りぢやア恩讐共に昔の夢覆ひし雲も晴れ渡る實に美しき人心、南無頓生菩提と兩手を合す本來の其佛心の尊さよ、かくて山國七郷の民も情けに青の洞門今耶馬溪に残りたる昔語りぞ嬉しけれ。



13

大文字屋の段

中 豊竹 竹本 大隅 太夫
切 鶴澤 友次郎

紙子仕立兩面鑑

大文字屋の段

この淨瑠璃は明和五年十二月北堀江座に初演された菅專助の作で上中下三巻八段からなつてゐて、この大文字屋は中巻の切になつてゐます。此の段の内容は

大阪上町での大店萬屋の悴助六は

母 妙 三
手代 權 八
大文字屋 榮三郎
萬屋手代 忠兵衛
嫁 お 松
萬屋 助右衛門
手代 傳九郎
下 女
丁 稚
仲 仕

桐竹紋太郎
吉田榮三
桐竹政龜
吉田多三郎
吉田文五郎
桐竹門造
吉田玉藏
吉田文枝
桐竹紋昇
大ぜい

人形

者で妹に身を賣つて揚巻身請けの金子調達を勧めるので、お松も夫のため喜んで承知する。この一部始終を聞いた親の助右衛門は兩人の誠を感じ揚巻の身代金を出して其年季證文を持って大文字屋を訪れるといふ親の慈悲妻の貞節、義理人情に絡む絶品です。

(床本) 大文字屋の段 (中)

高臺の御製の詞ゆるぎなく竈賑ふ浪花津や寄り來る人も大阪は實に日本の臺所、諸色諸問屋立つとく中に取わけ本町筋、家柄古く身上は左前でもしが隠す河内木綿の長暖簾、萬屋の助六が女房の里と格式も大文字屋榮三郎、男一疋和らかな綿商賣の店先に汗水たらし仲仕共、咄しまじりにこてくと、つくる江戸荷のしめ括り、片手に印書く墨の眞黒になる

七つ前、仕廻仕事ぞせはしなき、帳箱には手代の権八、番頭顔の鼻高々、煙管ひねくりまがり聲、ア、コリヤくくく口やかましい世間咄し、置てもらふ、口が動けば手がやまる、仇口ばかり仰山でねつから仕事のはかど行かぬはい、僅七駄の荷造りに二人三人が一日仕事、それではとんと、勘定にかゝるものぢやないと、わめきちらせどいつもの事と、耳にもかけず仲仕共、ヤコレ申し權八様もかたしてもせかくくくとなんぼ其様にせかしやつてもな、手は二本はかないによつて、二人前は働けませぬはいな、お前さんもまた日がな一日其様に内で修羅くらにやせずと、ちつと神まゐりか、また何處ぞの淨瑠璃でも聞きにかしやれませぬかい、エ、それを貴様にならばふかい在の買まはしから諸國のかけ引おれ

が胸の算盤一つで一桁違ふても内は暗闇身上の狂言に追立てられて芝居所かい、よい仇口を叩かずに、仕事仕舞たらいんだくハイくくくイヤモ番頭様のきまりがよいので、お影でだんく荷のでる口が少なふなつたはい、ハ、ハ、これでは出入方も胸の算盤の桁が違ふ、二進が三進も行にくい早ふ仕舞てまん直しに五かゝの顔など見よと仕事片付け掃出して、挨拶そこく立歸る、エ、頃の過ぎたならずめらと、ぶつゝく後ろの暖簾を上げ立出る榮三が母イヤノウ權八、さつきにから音がせぬが榮三はまだ戻らずかと言ふに權八しかつめ顔ハイ朝めしの箸下に置くと驅け出した旦那殿、大かた九郎右衛門町か島の内へ見山屋でかなござりませうぞい、イヤモ近年田舎の不景氣で掛損の仕つゞけ。モ氣もせ

やくは此番頭ばかり、其上諸式は皆高値極つた上にもきまらねば仲々いけぬこちの身代じやにアノ旦那のゝらくらには此白鼠もヤモほつとこまつた、と主の影口憎て口我はがほするつらにくさ、むつとはすれど色にも出さず、ヲ、權八のづけくといかに心安いとて、主の影口はよふなもの、常に實體な榮三郎、何のそんな所へ行やらうぞ、噂を聞けば此間、清水でのやつさもつき、聲の助六殿は親御の勘當、との事ア、よくくの事で有らうがそれに付ては娘のお松、嘸や便りなからうと榮三もわしもとつ置つモ夜の目も合はぬもの案じ、大かた鞆殿の託言せうと萬屋の同行衆へ談合にかな、いたので有らうぞいの、ハテそれはいらぬ氣もせでござりますはい、モ大事の娘御の鞆様ぢやが申しおかみ様の前で

はちと言憎い事じやけれど、此のま
あ廣い大阪に最一人とない大たわけ
ア、いとしほなげにアノ美しいお松
様を七里けんばいけり飛し揚巻とい
ふアノマア古狐にだんまされけふも
あげ、あすもあげと毎日々々揚詰に
豆腐のあげでもアノ様に買ふてはイ
ヤモとんとたまるものじやござりま
せぬ、揚句のはてにはふんづまり、
マ、有らう事か有るまい事か萬屋の
若旦那とも、言はれる身でかたりを
したの、イヤ贖金を遣ふたのと、や
ばな事の有條それからおこつての久
離沙汰それでもまだ仕たらいでとう
く揚巻を引揚て歩錢借りのまゝの
稽古でコレマ高歩蹴りと出かけたは
いなハ、ヤア、そりやマアほ
んの事かいの、イヤモほんの事か
いの、所かいなハ、何が全盛
の大夫の事なり、新町の親方から關

破りと願ふ故、代官所からも嚴しい
お手當、どうで追付青細引ヲ、こは
く、ヲ、恐ろしやのホ、モ
咄しするさへぞつとすると尾鱈を添
へしわんざん口、聞く妙三は氣遣ひ
さ老の習ひの目にもろき涙のしづく
くる珠數の玉も數添ふばかりなり、
何と肝が潰れませうがな、ヲ、其咎
々々ヤ、お道理でござります、は
い、私も聞いた時はモ腹が立つて
く、餘り腹が立ち過ぎて悲しいやら
又おかしいやらおかし悲しい悲しお
かしいおかし涙がはら、ハ、
、ヲ、私とした事が餘り咄しに身
が入つてお前様までを泣しましたは
いなア、シタガようお聞きなされま
せやそんな大それた科人の助六殿故
親御の勤當はコリヤ尤じやと思はれ
ます、それに付てお松様をアノ萬屋
の内にべん、と置いたらどんな難

儀がかゝらうやら知れませぬぞへ高
が嫌ふて置きざり同然にしられたお
松様ハテモ男日照りには有るまいし、
ちつとも早ふ呼戻して又ほかに相應
なよい談合も有りそふなもの、マ、
よふ御思案なされませとお爲ごか
しのそしり口、鞆のわらから焚付る
硫黃の鼻の先智恵は修羅を燃さす工
みかや、さとき妙三權八が詞のはし
く、何とやら合點行ずと手を打ちふ
りヲ、權八の何にいやるぞいの、警
鞆殿はどう有らうと一旦嫁入らした
れば萬屋の娘あちから戻されたら是
非もなし、難儀がいやさに取戻す様
な、さもしい心はないはいのハテモ
鞆殿がござらば舅は親、助六殿の
かはりに傍に居て孝行をするが嫁の
道假令他人が聞かにかこそ人中でそ
んな事言出して大文字屋の恥ふれま
ふて下さるか、恥しめられて佛頂

面テモ扱も堅いはく、エ、マ年寄の片意地と鐵箸のいがんだのは、どうでも焼かかやマ直らぬかいな、爲になる事いふがいやならどうなと御勝手になされませハレヤレくくしゆんだ咄しで氣がつまつたドリヤ臺所へいて暖燭でばい一引かけようと禮儀をしらぬのはふず者、つぶやき勝手へ入りにけり、後には一人母妙三舞と娘の身の上を案じ重なる憂思ひ西の辻から忙しげに此家の主榮三郎心の屈托顔色に出さぬは百倍氣苦勞の胸を押へて立歸る、母は見るよりヲ、榮三戻りやつたか、朝早ふ出て今頃まで何處に何してひもじかるといふを押へてアイエく晝飯は得意先で呼れました、ヤそれはそうと母者人、どこへいても舞の噂、ア、ひよんな事に成りましたはい、さいのふ今も今とて權八が舞殿のしなず

咄し、開けば聞く程氣のもめる事ばかり、マアどうしたらよからうと、そなたの戻りを待兼ました、ヲ、お道理でござりますく、シタガ申し母者人、爰をよう御合點なされませ助六は勘當なれば相手のない妹助右衛門殿が戻したふても、サ何やかやの義理を思ひ遠慮の場合も有りそんなもの、そこを汲み取らぬはこつちの不粹、何んと妹を取戻さうじやござりますまいか、と律義な常の氣質とはそぐはぬ詞の先折て、ア、コレ榮三、そなた迄がそりや何事、マようものを思ふても見や、たつた一人の子に別れ力ない身御、殊に近頃はきつい弱り、せめて寢所の上げおろし介抱さすが一つ家のよしみ、アイヤくそりや悪い御了簡、大金持の萬屋、一人息子が身を打つ女郎、請出してやりたいけれど、義理有る

中から貰ふた嫁かせになつてそうもならず、所で助六を追出したら嫁の方から逝るは定、そこで太夫を請出して、助六を呼戻す思案のそこと見た目は違はぬ、又助六は猶以てうるさがる妹、何も其様に親子ともみないものくふ様にして貰はいでも、大事なじやござりませぬか、ハテモ十人並には勝れたお松、取返して何處へなと、イヤコレく榮三そなたはマアおかしい氣を廻す人じや、助右衛門殿に限りそんなむごい人じやない、フ、フ、それはお前の正直一遍といふものモ此の様にもちや付き出すと、常態にした仲でも、むごい氣の出るが世間の有様、ナ申し、どうで有らうとお松はこつちへア、榮三聞きとむない、まだいやるはいの、助六殿は勘當でもお松と夫婦の縁は切れぬ、女房の方から隙取ると

はそりや大法に背いた事、それまでもない、二人三人男を持たして可愛い娘を疵者にはヲ、此母が得すまいエ、マあほらしいといつけない母の腹立ちぐはつたびし道具に當り中の襖押明け入りにけり。

(床本) 大文字屋の段(切)

既に日もくれ飯焚が燈す勝手の方方に十方失ふ氣はくらやみ、心にもないわんざんを、いふも榮三が算盤の桁をはづれて門口の大戸おろせど落付かぬ胸の算用とつ置つ思案の中戸に人普して萬屋の手代忠兵衛、上りに口を手をつかへお袋様榮三様へも助右衛門申します、ちと御相談の事に追付けそれへ、マア嫁をさきへ遣はします、委細はお目にかゝつて申上げませうといふ中門へ提灯のかげも心もかきくもるお松といへど色かは

る、顔は辛苦におも瘦せて、敷居も高き兄の内、供のでつちや腰元も、氣の毒そうにしよげと猫に追はれた忠兵衛は榮三が返事お松にも挨拶そこへ供の者、皆打連て歸りける、妹はしほへ兄の傍ものも得言はず衿に顔、榮三は奥口見廻してア、此の間は定めていかい氣あつかひそれでかきつう色も悪い、推量して下さんせ、世界に運の悪い者は私斗りのやうに思はれて手も力もござんせぬヲ、そう有ふへ何かの様子聞た故今夜は是非共おれがむかひに行く所、よう戻つてたもつたのう、何のよう歸りましたよ内にも寝ぬ殿御でも、大事にするが女房の役と、心一ぱい氣を付ても、氣に入ぬは私が誤りついにへ小やさしう氣の落付た事もない夫婦仲でも萬屋の内から葬禮しられいとかゝ様のおしへを守り

辛抱したかいもない、夫の勘當其上に關破りのお尋者と聞いて今朝から湯水さへ咽を通らぬ癩の痛み、身御は最前もア、よい時に勘當した、關破りをせうが首の座へ直らうが親へ難儀はかゝらぬ祝ひ事に酒一つと立派にはおつしやれど目には一ぱい涙を持ちわたしが、かんしてつぐ酒をお請けなされた盃もふるふてこぼれる酒よりも膝をぬらすは舅と嫁の、涙は堪忍せぬものと、むせ返りたるくどき泣榮三も俱に目をこすり現在の兄が氣にさへ感じ入つたそなたの貞節、助右衛門殿の心根を推量した故モ今も今とて母者人に思ひもせぬ廻り根性所へかう戻つて来たは、おれが存念の届いた印、コレわがみの其直な心を見すへておれが一つの無心が有るがなんと聞いてくれる氣かヲ、マ改つた事おつしやります兄弟

仲に何の遠慮、モどんな事でも聞
てたもるか、アイ、そしたら新町へ
いて、勤をしてたも、エ、ヲ、
悔りする筈じゃ、二張の弓はひ
かぬと女の道を立るそち、何と勤が
しられうぞ、がそこを破つて勤をす
るが、やつぱり夫助六へ心中、つら
い勤めするを心中とはへ、さればい
の、勘當しられてうろたへ廻るはし
よ事がないと諦めても濟せど、揚卷
を連て、退た助六關破りといへば科
人どのやうな憂目にあはやらふサ其
科を助けふと思へば、揚卷が身の代
親方へ立てさへすれば、御上體はを
願おろしてモ何のふしなう事は治る
といふて其身の代がはした金で出来
る事じやない、しりやる通り近年は
不手廻しなこちの身上モ中々才覺及
びもない事、いかぬからの思ひつき
昨日揚卷が親方、扇屋に直談して義

理合の内證萬端分明てモ近頃無理な
事なれど妹のお松をかはりに取て
申しおろしてくだされと、だんく
と、歎いたればア、了簡のよい親方
よし揚卷が戻つてももう疵のついた
大夫、ほかに身受けの客も變改、廓
の勤めはもとよりさゝれず、しかへ
に出しても虫付きと思ふやうに金に
はならぬ、器量よしと聞及んだ萬屋
の嫁御、ハテ得心づくで勤める氣な
ら、ヤこりや一番して見物じや、聞
き分けたと、約束はかためて置たが
コレおかしい所をりきむ兄と思はふ
が、爰をよう聞てたも、先の萬屋助
右衛門殿はそなたやおれが實の伯父
貴、其後繼に手代を引上げナア、ア
レ今の助右衛門殿、家の甥と念頃
にぎちかはするこちの身代モ肩を入
今日まで世話して下さる深切さ其息
子の助六が難儀を餘所に見て居たら

ア、血を分た從弟ならだまつても居
まい表向は伯父の從弟のといふても
血筋でない放れ際、どうよくな捨て
置けとサ思ふやうな助右衛門殿では
なけれ共、世間の口より此榮三が胸
がどうも濟にくい、サ爰の所を辨へ
て廓へいても勤めてたも、きのふ
けふまで萬屋の花嫁御と、人に人を
連れた身が日傘をさしかけ、人の中
道中、そなたの面目ないよりもおれ
が外へ聞え不甲斐なき、人に指さし
笑はれるもコレ義理と金とに恥を捨
る心を思ひやつてたもと、母の手ま
へを憚る涙、聲をも立ず男泣お松も
涙の顔ふり上げ、アイくくくく
もふくくく、何にも申しませぬ、よ
う勤めさしてくださんす、兄様嬉し
い忝ない、ア、是を思へば清水で夫
の勘當ゆり次第、退ふといふて揚卷
殿證據にもらふたコレ此櫛、助六様

も手を切る印と守り袋の七枚起請、今さら義理の言い過し、取返されぬと合點して大阪放れ添ふ様に連れてかけ落さしやんしても、世間もせまくイみのならぬ時には突き詰めた日頃の律義一筋に、もしひよんな心でも出よかと思やわしや身もよもあらぬ、嬉しや勘當^{かたがひ}放りたらば心置かない女夫じやと楽しんだのも夢現とてもわたしは世の中の女の數にも入られぬ身が、夫の爲にする勤め、恥しいとも、無念な共、口惜いとも思はぬが舅御や、かゝ様や、お前の心を思ひやり、それが悲しい〜と、くどき歎くぞいぢらしき、不便と思へど氣を取り直し母者人の手前は一寸遁れ世間へ顔が出されぬ、そなたは京の懇ろ中へかけ落した分にせふサア〜早ふ新町へ連れていきたいそんならわたしや書置きを、ア、イ

ヤもうそれには及ばぬ事、榮三出かした。お松よう新町へいたもるのう。母者人お前さつきにからの様子をヲ、暖簾の内に立開きして泣いてばつかり居たわいの、四百四病の病より貧ほど術ないものはない、貞女は兩夫にまみへずと、女大學傍に置いて朝夕おしへた母親が、夜毎〜に越路の客や、筑紫の人に添寝する勤めをようする出かしたと誓るは何の報ひぞとどうと身を投げむせかへればア、コレイナかゝ様〜其のやうにむつかつて持病おこして下さんすなへ、わたしや何にもかもよう合點して居るさかい一つも悲しい事はないナ、ない〜ない〜といふ後聲もしやくり泣ヲ、道理御尤、道理じや〜御尤じや〜サイノ、人を泣かすものはないわい

のと三人顔を見合はして手に手を取り組み、泣く涙、落瀧津瀨^{おつたきつせ}に春雨の猶ふりかゝる如くなり、まだ暮れ過ぎと蠟燭のしまつに闇も苦にならぬきんか頭の助右衛門、くゞり戸ぐはら〜暖ばらひ、ずつと入り來る姿を見て、親子は泣顔押しぬぐひ、ヲお出でなされませ、エ、まだお見舞も申しませぬが、ア、たんとお心づかひ、なんの〜一家中から譲りうけた萬屋の家督棒に振りかける助六め、まくり出して仕舞ふたりやさつぱりと夜が寝よいが、ア可愛いは此のお松、悪性な男を引つか〜へ身への心づかひ、大阪中の嫁といふ嫁に煎じても吞したい、器量といひ、まだ廿にもならぬ者を、べん〜と留めて置くは、大きな殺生、今夜切りに縁切つて戻します、定めて不足も有るけれど、かゝり子を捨る様な

不仕合せな助右衛門何事も了簡して下され、ヤ、ナニ嫁ア、いやもう嫁ではないお松女郎、何でも用があるなら遠慮せずと手紙でもはなれて居てもおれが氣は、やつぱりかはる事はないと、いふもほろりと涙聲、母親はすり寄つて、平生お世話に成つてゐる榮三郎、不足とは勿體ないがたつた一つ聞入れませぬは助右衛門様、助六殿は一人子の事、大金持のこな様揚巻とやらを受け出して、ハテ妾めかけは有るならひ、手元へ取寄せて置いたらば、廓通ひも忽ち止み、マ此やうにやかましう悪い愛名も立ぬ道理、ア、コ、コレかみ様くくくエそれや大まかなりな、了簡じやわいの、譲り請けた身代でも盗み出してつかいおるけしよ事がなけれど、親の手から傾城受出す金出しては先助右衛門殿へ言ひ譯けがご

ざらぬはいの、又あかの他人のおれを伯父くくと義理を立て、けつこう捌くこなた衆へもみすく妾を傍に置かしてコレ此の顔が合はせられませうかく其の上のらめを勘當した後で吟味すれば備後の殿様から拜領した東倫の三幅對、箱ばかりで、中は明きがら、折りわるふ殿様も近々にお登りお手馴の掛物久しぶりに見やうなど、御意がออกมาいものでもないもしそうなつたらやくたいこくたいがこりや息子めをそゝのかした傳九郎めが所爲と思ひ、親受人へ吟味にやつたりや、傳九郎めは其の夜から行方が知れぬと言ふ隙やつて仕舞た奉公人、親受人もねだられず、難儀の元は皆息子め彌々勸當の錠前をおろさねばならぬ様になつたも此のお松が不仕合はせおりに諦めて涙も出ぬが、嘸、こなた衆のと後言ひさし

顔を背けてたぐり咳榮三も涙吞み込んで、ア、段々とお氣のもめる事ばかり、ア、いやく何事も思ひ流して勞れの出ぬ様になされませ、申しオ妹は慥に受取りました、サア相手のない若い嫁を逝しませず傍に置けばア、あの親爺め合點がいかねわいのと、近所となりと思はるゝもいやさに氣の毒ながら舅去り、ヤ書いて来た去り狀と、渡せば手に取り泣き入る嫁おしひらいてふしん顔兄様わたしは讀ぬがあじない文章ドレドレヤアこりや揚巻が年季證文ア、マ、モウ、龜相いふまい、そりや去り狀くくくじや、トハ又どうしてマ、どうしてはそつちの胸に覺えが有らう今朝からぶらんこちの内を見入れて門先をあちこちとするは道具會で近付になつた新町の扇屋、ハテ合點が行かぬと、隣りの見世の片たかけへ

よび込んで追かけくはしく様子を問へば揚卷が代りに妹を賣つて助六が關やぶりの科を助けてやりたいと、涙を流して、榮三殿が段々の頼み故嫁御の器量を見に來たと、モ一ぶ始終を委しい咄、従弟といふは名斗りで、根は他人の悴めを、マそれ程にまで思ふてくださる深切、何と嫁が賣されふく揚卷が身請するにこそ血筋は引かねど姪と名の付くお松が身受けモ千兩萬兩投げ出しても草葉のかげの先助右衛門殿がよもや腹も立られまいと、買ふて取つた其證文モ眞實誓文こりや悴めが可愛じやないぞや、こなた衆親子三人の志が、モあんまりく忝けさ、氣休めにと氣休めにとあられぬ去り狀まんざら惡巧みはせぬ助六め、追付け身の明りも立ち、首尾よう内へ戻つた時、又改めて嫁入の式金は、其去り狀マ

どれ程義理を知らぬ悴めでも此様子を聞いたらば、心も折れて夫婦中、睦じうなりそうなもの、何とそふではあるまいかと、色も香もある、梅干親父辛ふ見へてもすいなりけり、親子三人手を合し忝け涙一時にわつと泣聲耳に手を當てアレ又泣しやるはいのくくア、もうくくく此間は涙にほつと飽果た、どりや逝せましよと門の口とつかは出るもゆつくりと、泣きに逝せるぞ哀れなり、母親は氣を付けて是れはしたり、くからうソレ榮三提燈を、ハイちよつと送つて參りましよと、手早に燈す小提燈追付行けば母親も、娘も少々落付いた胸をさすつて奥の間へ襖押し明け入りにける、往來ゆきも暫しとだへしと四方に人音かすかなる、折を見合はず格子先妙法蓮華經申すも愚かや祖師日蓮大菩薩、龍の口にて太

刀の下に直り賜ひ又或る時は佐渡が島に流され賜ひ、難行苦行なされしも、彼一物をせしめんための御誓願なり、なむ妙りんはなれどさへ渡る法華の題號相圖と見へ内よりくゞりそつと明け傳九郎きたか、權八首尾はまぶじやく世話なしに娘は戻つた、助六が來て居ると一ぱいくはして爰へ出そ、われも身振りを助六で物さへいはねば知れぬが暗り、くはへて退いて腹存分樂んだ胴がらは約束の通り京へ賣り其の金は權八にアコリヤ大きな聲すなやい、そのところぬかりはないわい、がいやな事は金七が、此中の晩から行衛が知れぬ、ひよつと隆助か助六に捕らまへられたら大きなぼく、モウおれも大阪に體は置かれぬ、ヲ、そりやうつかりとして居られぬが、マア何であらうと娘はおこそ、油断せぬや



おしゆんちかごろかはら
傳兵衛 近頃河原の達引

四條河原の段

堀川猿廻しの段

四條河原の段

竹本 鍛太夫
豊澤 寛治郎

人形

廻しの久八 吉田 玉徳
横淵 官左衛門 桐竹 門造
井筒屋 傳兵衛 吉田 榮三
仲買 勘造 吉田 多三郎

「それや聞えませぬ傳兵衛さん」で有名なこの淨瑠璃はおしゆん傳兵衛の心中を主材としたもので、元文三年十一月十六日の朝京都聖護院の森に於て發見された呉服屋井筒屋傳兵衛と先斗町近江屋の抱へお俊との情死事件と、同じ頃京の公卿侍と所司代の部下とが四條顔見世芝居の歸途喧嘩刃傷に及びし一件と、孝子として表彰された猿廻しの丹後屋佐七の話とを取合せ佐七を與次兵衛に作りお俊の兄として構想したものです天明五年五月江戸肥前座に書下ろされ、爲川宗輔、筒井半二、奈河七五三助の合作であります、これより

先き豊竹八重太夫が天明二年道頓堀中の芝居で語つてゐます。この河原堀川は全三段の中の巻です。

(床本) 四條河原の段

名に高き四條河原も冬ざれて川風寒く吹きすぎば往來も浪の石走る、水音高く夜はなをいとしんくと物凄く曇る空より我胸の戀路にくらむ官左衛門尻引つからげ高足駄さす傘の横しぶき勸藏引きつれのつさく川邊に茂る柳影、傍り見廻し立ちとまり、イヤナニ勸藏、先頃祇園の社内にて出入りの町人傳兵衛めを贖金を以て一杯くはせ、彼が手代萬八との方が働きにて街り取つたる三百兩、分け口取らした其の後はいかゞ致した、イヤモ其の時はやばな仕事どうやら斯うやら言ひくるめ、ひやいな所を漸々遁れ萬八とこの勸藏分

け口の金せしめたれど、昨日今日まで影隠しぶら付いて居たればモウ根太切れ、が爰で逢ふたは惠方の神申し且那久し振りじや、何んぞ味い事はごんせぬかいのふヲ、有る共く今宵此の所で待ち伏せするは外でもなく日外ツツより紛失せし飛日川の茶入れ此の度び將軍家より所望に依つて俱も吟味に及びし所彼傳兵衛奴が今宵四ツまでに尋ねだそうと請合しは先達某が密かに盗み取りし事、どうやら氣取つたアノ青二才今宵此所へ釣り出し人しれずばらしてしまい、行衛知れざるお俊めを尋ね出して身が女房何んとい魂膽で有らうがなと、語るを聞いて仲買勘藏横手を打つて、ヤ、さつてもシタリ出來したく、フハ、併しあいつもちつくり骨のあるやつ今にもうせたらこな様一人此の勘藏も俱に加勢を、ム、

ナニサくたかのしれた素町人、餘人を頼むに及ばぬ事、それよりは、まづ其の方は是れより直ぐに引返し邪魔になる久八めをぶち放しお俊の有所を尋ね捜し引つかたげて立退きくれば、ヲツト其のぐらいの事は朝飯仕事、モシお氣づかひなされますなム、出かしたういやつ、と當座の褒美と投げやる包み、おつと合點してやつたと、慾と惡とを仲買勘藏川端さして走り行く、後に横淵したり顔腰の大だちすらりとぬき、寝刃ねば合して打點き、鞘に納めて待つぞ共しらぬ井筒屋傳兵衛は龜山のお屋敷より急御用とのしらせを聞き、雨をしのぎの辻駕にて急ぐ道筋、井筒屋としるしの提灯打ち落せば、恠り仰天、駕早き共、こりやたまらぬと駕打ち捨ていづく共なく逃げて行く、駕の内には驚きながら、何事やらんと垂

れ引上げ飛んで出たる傳兵衛がそれと見るより聲をかけ、ヤア何者なれば此の狼籍、ム、ウ聞えた往來の人を惱して剝取をする盜賊よな、ヤア盜賊とは慮外千萬コリヤ其の方が出入の屋敷御勘定役の官左衛門様だと聞いて傳兵衛小腰をかゞめ、ハ、コレハ、雨夜の事なり、あいろは見へず、存じ寄らねば只今の無禮、眞平御免下さりませ、さりながら其又官左衛門様が何故有つて、此の所にヤ、お尋ね申す暇おしくお屋敷よりの急御用御免とばかり、傳兵衛はよらずさはらず行んとする、ア、コリヤ待て、其屋敷の急用と言ふたのは某が拵へことだはい、エ、サア其方をこゝへ釣り出したは、別儀ではないたかがわれを打ち殺しお俊を女房にする心だ、まだそればかりでない、館の重寶飛日川の茶入を某が盜

たい此の生じらけたしやつ頬を見る
 度事に、カアブウ胸が悪いはい、ヤ
 イ粕賣女のおしゆんめとようもく
 ちゝくり合、長の年月某を大馬鹿者
 に仕おつたな、つもりくし意趣ば
 らし胴性骨に覺へよ、アイタ、こ
 りやあんまり、何だく其つら何だ
 口惜しひか無念なか、ムイヤ左様で
 はござりませねど、あんまり殿しい
 お手の内サこれで、あなたのお顔も
 立ませうどうぞ茶入れを私にヲ、戻
 してやらう請取れと言ひつゝ茶入れ
 追取つて、せき留石へ投付ければ微
 塵になつて飛日川、碎け散るこそ是
 非なけれ、ヤ、は、是れ程までに、
 ことを分け、あまつさへ、泥脚にか
 るる大事の場所と思ひ手向ひもせず
 勘忍の二字を守つて詞を下げ頼むも
 お家大切さ、殿の浮沈におよぶ茶入
 れ打ち碎いたる大悪無道コリヤモウ

絶対絶命じやはい、ナニ絶命だ、ム
 、ン絶命なれやわりや、どうするヲ
 、眞斯うすると切付ける、こなたも
 強氣のめつた斬、うけつ流しつ戦ひ
 しがいかゞはしけん官左衛門。石に
 躓きよろくよろ、すきを見すまし
 エイヤツト脊骨をかけて切り下げら
 れよるめく所をつかゝり、思ひ知
 れやと、とゞめの刀柄も通れと突き
 つらぬき一息ほつと突き出すかね、
 ヲあの鐘の音は清水寺、冥途へ導く
 諸行無常ヲ、そうじやくと身づく
 るい覺悟極めし其處へ息もすたく
 廻しの久八、すかし眺めてヤア若旦那
 那じやござりませぬか、ヲ、久八、
 よい所へよう來てたもつた、餘儀な
 い譯で官左衛門を切り殺し、とても
 生きては居られぬ此の身、親人への
 不孝の段々お詫び申してお俊へもよ
 きにとばかり後言ひさし、手に取脇
 差久八押へて、ア、コレマアおまち
 なされませ、あぶないくくハテ
 扱てマア氣をしづめて若旦那私が言
 ふ事とつくりと聞しやりませ、斯う
 言ふことも有らうかと氣はいらて共
 どつさくさエ、外の事でもござりま
 せぬが、彼の紛失の茶入の事、サア
 その茶入を官左衛門がたつた今、打
 ち碎いて仕舞ひおつたはい、サ、宜
 敷うござりますくハテお氣遣ひな
 されますな、そりやお前様、眞まか
 いな贖物でござりまつせ、エ、サア
 背にひらりと見付し勘藏合點行かじ
 と付け廻し窺ふ中に案のせふ、お俊
 様を引かたげ、かけ行く所をひつと
 らへ、しめ上げて様子を聞けば官左
 衛門に頼まれたと、いちぶしどゆの
 咄し誠の茶入れはお前の手代行方知
 れぬ萬八に預けてあると勘藏めが苦
 しき餘つてさつきの白狀、モウにつ

きにとばかり後言ひさし、手に取脇

堀川猿廻しの段

切 豊竹 古靱太夫
鶴澤清 六
ツレ 野澤 喜代之助

人形

與次郎の母 吉田 小兵吉
弟子 おつる 桐竹 紋司
兄 與次郎 吉田 玉徳
娘 おしゆん 吉田 文五郎
井筒屋 傳兵衛 吉田 榮三

くひやつは萬八め、モシ若旦那、切腹とは悪い御合點短氣は損氣、わるい事は申しませぬ、片時も早ふ飛日川取戻すが上分別、サ、ちやつとお出でなされませ、ム、スリヤあの茶入れは贗物カエ、忝けない、さりながら悪人なれ共お家の家來切り殺せし此の傳兵衛所詮遁れぬ天の網サア其の網も何もかも身に引き受ける此久八、後かまはずと若旦那サお早ふお立なされませ、コレマ特からのどさくさかマ髪もばら、何ぞ仕様はム、マア、是なりと、手拭ひにつむむ涙の頬かむり、人の見ぬまにサア早ふぜひに、久八がすゝめの詞傳兵衛は心濟ねど立ちあがり行つ戻りつ踏み迷ふ、疵持つ足のはかどらず心せきくる早瀬川、更け行く空も定めなき戀と無常をうば玉の闇を力に落ちて行く。

(床本) 堀川猿廻しの段 (切)

M おなじ都も世につれて、田舎がましの薄煙、堀川邊に住居して、後家の操も立つ月日、琴三味線の指南屋も、合の手もつれ氣もつれを、保養がてらの薬風呂、あぶぐも我を澁團扇、目さへ不自由な暮しなり詞おつる様嘸ぞ待ち遠ほにあらうなア、そしてなにやらのさらへであつた、オ、それ鳥邊山、アリヤじたい、心中事、會にでも弾くのなら、お前は女の方、お繁さんは男の方、かけ合ひにうたふがよいぞへ、ドレ、お繁さんのかわりに、私と掛け合ひにうたひませうと、老手彈手もしほらしき、二上リウタ、女肌には白無垢や、上に紫藤の紋中着緋紗綾に黒縹子の帯、年は十七初花の、雨にしほるゝ立姿、男も肌は白小袖にて、黒き綸子に色淺黄

裏二十一期の色盛りをば、戀といふ字に身を捨て小舟、どこへ取り付く鳥とてもなし、鳥邊の山はそなたぞと、死に行く身の後髪、弾く三味線は祇園町、茶屋のやま衆が色酒に、亂れて遊ぶ騒ぎ合ひ合あ面白さを見る時は詞ア、イエ〜それではとんと聲にしほれがないはいな歌あ面白さを見る時はと、かう諷ひなされ。アイ、あの面白さを見る時は、詞オットヨシ〜染殿そなたと某が去年の初秋七夕の、座敷踊りをかこつけて、忍び逢ふたる事思ひ出す詞オ、今日はマアそこ迄〜、精が出る程あつて、きつう手も廻り出したモウ〜どこで弾きなきつても恥かしい事はないぞへと、聞いて笑顔の片男波、又明日といふ汐に、お鶴は立つて歸りける。母を大事と油断なき、見過ぎも軽き小風呂敷、肩に乗

せたる猿廻し、戻りはいつも日暮前
與次郎はいきせき門口から 詞 母者人
〜今戻つたぞや、オ、兄戻りやつ
たか嗚ぞひもじかる、茶も湧いてあ
る、膳もそこにして置いたぞやオ、
徳よ今戻つたかよ、今朝から子猿め
が親を尋ねてやかましい、コレ兄や
ちやつと傍へやつてやりやいのアイ
〜左様でござんしよとも、ソレち
やつと乳を吞してやりおれ。イヤノ
ウ與次郎、そなたが孝行にしてみたも
るに付け、私が此の長々の病ひも、
いつ本服する事であらうと思へば、
勞れの上に猶ほ勞れる、僅な弟子衆
の餘情や我身の働きで、此の養生が
マ、なるものかと思へば薬も毒とな
り、母ではなうて子供の爲めには苛
責の鬼と思はるゝ、鬼は冥途にある
ものを、つれなの老ひの命やと、身
を悔みたるむせび泣き、哀れにも又

いぢらし、詞ア、コレ母者人ソリヤ
マア何を云はんすぞいの、其の様に
みそやかな身代ぢやと思はしやるか
此の間弟子入りした米やの息子殿か
ら長々お袋の煩ひで、嗚かし勝手が
悪るからうと、云ふて雪か花かと申
すやうな、上白米の仕送り、店々の
旦那衆から、何なと用があるなら云
ふておこせ、若し出養生さしますな
ら、幸ひな隠居所もある程にと、云
ふて來るお方もあり、羊羹饅頭生魚
近所隣へ早々すそわけもしられねば
鯛赤貝の類は横町の鮓屋へ卸賣、モ
コレ案じる事は微塵もないぞや、そ
れにまだ〜まだ氣の毒なは、此の
家主が此の家を居なりに、買ふてく
れぬかと頼まれる。ヤレいやゝの
〜ア、あた世話な家持よりは金持
が、遙かましてあらうかと、母に案
じをかけさせぬ、嘘八百さへ一貫に

たらぬ節季の事譚を、云ふ下稽古やこれなるべし。嘘とは知れど老の身は、子に従ふが慣ひぞと機嫌よげに打ちうなづき詞オ、それ聞いて落付きましたるが落付かぬは娘が事此の間も親方が、おしゆんを預けに來ていはしやるには、コレ傳兵衛殿と云ふ客の事でも内に置かれぬ事がある譬へ傳兵衛が尋ねてござる共、おしゆんが歸つて居る事は包み隠さねばならぬぞやと、くれぐれも云はしやつたぞや、サアわしも其の入り譚を聞いた故、おしゆんが心根を思ひやり思はずしらず涙が、ドレ灯を燈そと棚のすみこそく取り出す行燈の灯かげも洩るゝ暖簾ごし詞おしゆんコレおしゆん、アイと返事もしほくと思ひなやみし顔形、マアく愛へと小聲になり詞門の戸はかけてある、見る人も聞々人もない、方々

で噂を聞くに、此の間の川原の喧嘩殺し人はサ殺し人はわが身の客の傳兵衛殿なれど大恩請けた久八と云ふ者が、代りに捕られて往つたげなが其の場に落ちてあつた小柄があの傳兵衛殿が御屋敷から、拜領した小柄ぢや故天命遁れず御詮議最中、なれども其の夜から傳兵衛の行衛も知れず、其のあひ方の女郎はおしゆんと云ふ事をお上にもよう御存じで、親方の方へもいろくくと、御詮議あれどこれも行衛が知れぬと云ひ切つて今もめてある最中ぢやと、取々の噂評判おりやもう聞く度毎にびくくんとすると、聞くほどせまるおしゆんが胸詞其の夜の起りも皆私故、どこにどうしてござるやら心元なさ逢ひたさも、云ふに云はれぬ此の場のしな、いかゞと胸もふさがりし、母は一途に娘の可愛さ、詞コレくおしゆん

案じる事はないわいの、併し突き詰めた男氣で、ひよつとこちの家へ來て、刃物ざんまいでも仕やせまいかと、四五日は夜の目もろくに、モ寝られぬまゝの物案じ、世間にたんとある格な心中やなどしてくれたら、此の母は目かいは見え、兄はアレあの様な臆病者もしもの事があつたらば、跡で母はどうせうぞ、袖乞ひ物貰ひに歩いて、そりやもう一つもいとやせぬけれどもそなたの體に凶事でもあつたら、おりやもう直ぐに死んでしまふぞや、若い氣に前後思はず、義理ぢや、イヤ人の落目を見捨てゝはと、詰らぬ義理を立抜いて年寄りの此の母につらい目見せてたもんなやと、可愛さ餘る親心、ア、南無阿彌陀佛も涙聲、兄も共々ヤコレおしゆん詞今母の云はるゝ通り、何の義理もへちまもいらぬ、どいて

しまへばあかの他人ぢや又おれも氣にかゝつて、好きなものさへ咽へ通らぬわいのう、母者人の氣休め、おれが腹助けぢやと思ふて、どいてたもヤコレ頼む〜と正直一遍、母の心と兄の詞、勿體ないと思へども、切るに切られぬ胸の内所詮死なねばならぬ身の、此の場を抜けて其の上でと、心一つに思案を極め詞母様、兄様お二人の、お詞よう合點いたしました殊に又傳兵衛さん、ツイ一通りで逢つた客、深い半太夫サハリ譯でもないわいなア、併し勤めのならひにて、人の落目を見捨てるを、里の恥辱とするわいな、とても末の詰らぬ事わしや得心してをります詞ちよつと逢つて其の上で憎う惡うもない様に、得心をさせまして品しなよろ課けの立つ様に 詞 イヤ〜其の様に譯け立てると云やつても、あつちに得

心せぬ時は、それ〜行がけの駄賃馬で踏殺し、ア、イヤ〜無理殺しにせうもしれぬわいの、コリヤめつたにはかみ合されぬわいの、おゝ兄の云やる通りぢや、そなたに怪我でもあつては、傳兵衛殿とやらも難儀思ひ切るのがあつちの爲め、わが身に心引かれては、つい捕へられるはしれた事、退狀つゑじょうをやつたらそなたの事も思ひ切つてオ、切るとも〜、遠い國でも影を隠したら、身を遁れまいものでもないわいの。コレ〜むづかしかろ共ツイ一筆、兄硯箱取つてやりやサ、早う〜と母と兄、詞にいなも泣き顔を隠す硯の海山と重る思ひのべ紙に、筆の立てどの跡や先涙に墨のにじみがちなる胸の内書残すとは露知らぬ、與次郎は傍から 詞 コレノコレ其様に長たらしう書ずとも、ツイどきますと書いてもす

みさうな事ぢや。イヤノウ書いたものは後々迄も残る物、男の去り狀と同じ事、とつくりと譯けの分る様に書いてやるがよいぞや。アイ此の狀にとつくりと、御合點の行く様に、兄さん、此の文お前からお渡しなされて。オットよし〜此の狀さへあれば千人力ぢやマア〜母者人も落着かしやれ、とやかく云ふ内九ツ前お前も奥でサ、もうねやんせ、オ、それ〜今夜こそゆつくりと、心よう寝るであらう、兄もそなたもそこに寝やと、奥底もなき隔てをば、押し明けてこそ入りにける。詞 サおしゆん、こちらも爰で往生いたそ、アイとおしゆんが俱々に、暫し此の世をかり蒲團、薄き親子の契りやと枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて、更け行く鐘も哀れ添ふ。頃しも師走十五夜の、月は牙ゆれど胸の闇過ぎし

別れの言ひかはし、死なば一緒と傳
兵衛が、忍ぶ姿のしよんぼりと、イ
む軒は目覺えの、慥に爰と門の戸へ
さはる相圖の咳拂ひ、聞くにおしゆ
んが飛び立つ思ひ、上げる枕も打ち
はづす、與次郎は傍に高野心も俱に
行燈の、灯火ふき消しさし足に心せ
く程明け兼ねる、戸口の鏝表にも 詞
おしゆんぢやないか、傳兵衛さん、
よう逢ひに来て下さんしたと、云ふ
聲寢耳に與次郎が、恟り起ると明く
る門の口、妹が姿もくら紛れ、とら
へる袖のふりあはせ、おしゆんと心
得傳兵衛を、無理に引き込み取り違
へ戸口を内からびつしやり引立て 詞
そりやこそつれに來おつたぞ、おし
ゆん必ず外へ出まいぞや、戸口はお
れが押へて居る、ヤア門に居るは傳
兵衛ぢや、おのれを入れてよいもの
かと、いふもがた／＼胸ぶるひ、 詞

コレナア兄様わしや表に居るわいな
何ぢや表に居るわいなア、ヤア其の
聲色置いてくれ、そんな事喰ふおれ
ぢやないわい、母者人、母者人、傳
兵衛がおしゆんを殺しに來た故、今
表へたて出した、おれ一人では手が
廻らぬ、こなたも加勢して下され、
加勢／＼と、うろ／＼と、うろ
たへ騒ぎ母親も、何ぢや／＼傳
兵衛の加勢、ム、まだ外に同類でも
あるのかと、探り寄つたる傳兵衛が
傍、 詞コレ／＼おしゆん、顫ふ事は
ない兄や母が付いて居る、マア氣を
鎮みやと撫でさする脊中の手ざはり
合點行がず 詞コレ／＼與次郎、どう
やらこりや娘ではない様なわいのヤ
アくらがり紛れに材木が紛れ込みや
せぬかや、こなたつかまへて居て下
されやと、探る手先に火打箱、がち
／＼ふるふ附木の光り、 詞シヤアコ

レヤ妹ぢやない傳兵衛ぢや、お袋兄
御、エ、面目もない此姿と猶も小隅
に屈み居る。コリヤヤイコリヤ其の
様にしほ／＼として見せて、おいら
を欺して、おしゆんを突うとするの
か、其手はくはぬと懐より一通取出
しこは／＼ながら傍に寄り、 詞コリ
ヤ／＼傳兵衛、おしゆんと我と手が
切れぬと、科人のわれじやによつて
妹迄難儀する、それでさつきに妹に
得心さしてどき狀を書かしてあれば
コレこれを見い、これぢやによつて
モウ／＼おしゆんが方に殘心氣
は離れてあるわいム、スリヤおしゆ
んが其の退狀をサアどき狀ぢやエ、
其心とは知らず云ひかはした詞を誠
と思ふて迷ふて來たが無念なわい、
口惜しいと齒を喰しはる男泣き恨を
聞くも隔たる戸口心は、さうぢやな
いぢやくり 詞オ、嗚ぞ腹が立う道理

ぢや〜マア〜とつくりと氣を鎮めて、退狀を見て下さんせいなア、オ、それでよい、長う物いやんな層が出るぞ層がコリヤヤイ〜傳兵衛おれが讀んで聞かしたうてもな皆目おれはナニアソレオ、祐筆ぢやわいサアサア早うと封じめ切り突付られて目に溜る、涙を拂ひ、詞ナニ書置の事ヤア何ぢや、書置ぢやコレ〜兄正直な、恠りする事はないわいなそなたは無筆わしや盲、書置じやと讀違へ、うろたへさして門口へ出て娘を存分にせうとのたくらみ、ハアハ、そんな嘘は喰ませぬサアサアほんまに讀ましやれ〜コレコレ與次郎、表の娘に氣を付けて門の戸を明きやんなや。オ、呑み込んで居る爰にはおれが、へ、へばり付いて居るわい、サア〜〜早う讀みやいものこそよう書かね聞く事は祐、ヤ

ナニ無筆じやないわい、サア讀だ〜〜。エ誠にこれ迄の御養育、海山にも譬へがたき親の御恩、殊更不自由なる御身の上、何卒首尾よう勤めを遁れ、世を樂に過させまし候は、せめて少しの御恩報じ孝行の片はしにもなり候はんとそのみ朝夕祈る處、〜、二世迄と云ひ交し〜傳兵衛様、思はぬ此の度の御身の難も、根を尋れば皆われ故に候へば、今さら見捨て候ては女の道立ち申さず候、不孝とは思ひながら、俱に覺悟を極ら〜。オ、母者人、どうやら風がかはつて來た様な、サイノウわしも胸がどき〜とサア其跡をちやつと讀んで下され下され。エ、俱に覺悟を極めら〜、先程傳兵衛様へ退狀と申して認めしは此の事申上げ度きま、退狀と偽り書き残しら〜。何事も〜前世よりの定り事

と、御諦め下され候、申上げたき數々筆にもつくしがたく候へ共、心せくまゝ申入れら〜オ、〜さてはさうした心かと驚く傳兵衛親子はうろ〜詞エ、氣づかひな、コレ兄や娘を家へ、早う〜と母があせれば與次郎も、戸口明ければ走りよる妹を無理に四人が、顔見合して溜息の、涙はさらにわかちなく、何と詞も傳兵衛が、泣く目を拭ひ 詞 一旦いひかはした詞を立て、俱に死なうと覺悟して、義理を立てぬくそなたの貞節忘れはせぬ嬉しいぞや思ひ廻せば廻す程我こそ死なで叶はぬ身、そなたは科めない身の上、俱に死んではお二人の歎き、命ながらへなき跡の、とひ弔ひを頼むぞと詞にわつと泣き出し、そりや聞えませぬ傳兵衛さんお詞無理とは思はねど、そも逢ひかゝる始めより、末の末迄云ひかはし

互に胸を明しあひ、何の遠慮も内證の、世話しられても恩にきぬ、ほんに女夫と思ふ物大事の、夫の難儀命の際にふり捨てて、女の道が立つ物か、不孝共悪人共、思ひあきらめコレ申し一緒に死なして下さんせと隠せし剃刀取り直す、詞マ、まて待ちおれやい、コリヤやいこれで死ぬると命がないぞよ、コリヤまあ何の事ぢや、とんと分らん様になつてきたわい、殺しに來たと思ふた傳兵衛殿より、今ではわれの方が手強うなつたぞよ、コリヤマアどうしたらよからうぞと、云ふもおろ、母親も、詞オ、さうぢや、我が子が可愛くと子故の闇に脇ひら見ず、これまでおしゆんがお世話になつた、恩も義理も辨へず、一圖に中を引別けろと、思ふた母は義理知らず、賤しい勤めする身でも、女の

道を立て通す、娘の手前面目ない、そなたの心に恥入つて、何事もいひません、傳兵衛様と一緒に、コレ死出の道連れしやいのう、したがこれ申し傳兵衛様、定めて親御様達もござりませうが、親の心といふ物は人間はおろか、たとへ鳥類畜類でも子の可愛さにかはりはないもの、おしゆん傳兵衛と云はず氣か、もしやお前が死なしやつたと親御様が聞かしゃつたら、悲しうて、此の世に残つて居る氣はあるまい何國いかなる國の果、山の奥にも身を忍び、どうぞ遁れて下さりませ、娘が心に恥入つて、天にも地にもかけがへない可愛い我が子を心中に合點してやる親心爰の道理を聞き分けて、コレ拜みます頼みますと、手を合はしたる母親の子故に迷ふ闇の闇、二人は何と詞さへ涙に涙結ばるゝ、血筋のわ

かれ與次郎も、涙の雨の古布子、袖喰ひしばりしやくり泣き、ア、傳兵衛様の歎かしやるも道理ぢや、道理々々と云ふて居ては、ねつからはつからいつ迄も分らぬ道理ぢや、詞がコレ傳兵衛様、母者人が今の詞、御合點が參りましたか、エコリヤ我も得心してくれたか合點がいたか、得心してくれたか、合點がいたか、サ、合點したらばどうぞ此の場を、立退く分別、併し其形では人目に立つ、京の町を放れる迄、此編笠で顔をかきし、幸ひの猿廻しまめで二人が末長う、目出たう女夫になりとげる、門出の祝ひに此與次郎が、お初徳兵衛が祝言の壽、此方衆も生別れの盃、イヤ、祝言の盃と祝ひ諷ふも聲びくに有田ウタ、お猿はめでたやな合ヒヤウシ、舞入姿ものつしりと、詞コレさりとは、ノウある

かいな、さんな又あるかいな 詞オ、
 徳兵衛様ござんせ、餘りこな様が來
 やうが遅いによつて、お初様は顔眞
 赤にして腹立て、居やんすわいのう
 コレお初様、舞殿が盃をしたいとい
 のう、機嫌直して盃を、戴かんせ、
 コレくくいたゞくノウ盃を、さ
 んな又あるかいな、詞ヤコレくコ
 レ舞様、足で盃をさすはあんまりつ
 れない、それでは嫁御様が戴かんせ
 ぬわいのう、ひざらずとほんまにさ
 してやらんせ、さうぢやくくそ
 こでお初がいたゞいた物ぢやコレい
 たゞくのう盃を、さんな又あるかい
 なヒヤウシコレ嫁御の晝寝もころり
 とせいく、ナコレエあるかいなさ
 んな又あるかいな 詞コレく舞様餘
 りつれなうさんすによつて、おしゆ
 んヤアノ何嫁御様が起さんせぬわい
 の、そこらでちよつと起したりく

エ、コリヤ、コリヤヤイ、コリヤ、去
 りとはくノウあるかいなさんな又
 あるかいな、ヒヤウシ 起きたら互ひ
 に抱付きやれ、オ、それで機嫌が直
 つたぞ、エ、あ、あるかいなさんな
 又あるかいな、くるりと返つて立つ
 たりな立つてくれ、コレくコレ立
 たしやませ、序いでに日和を見てた
 もれ、ア、よい女房ぢやにくノウ
 あるかいな、さんな又あるかいな
 ヒヤウシ 日和を見たらば落ちてたも
 く、オ、さうぢやくく、お猿
 は目出たや目出たやなサ、ま、ま、ま
 きりく此家を猿廻し、まさる目出
 たら何時迄も、命まつたら仕てたも
 と目は見えねども見送る母、詞も此
 の世で聞き納め、心の内の暇乞ひ明
 日の噂と形ふりも、やつす姿の女夫
 づれ、名を繪草紙に聖護院、森をあ
 てどに 三重 たり行く。

前 進 座 秋 季 大 公 演

十月一日初日

毎日午後四時半開演

① 大日向村
豊林省、拓務省推展
 陸軍省情報部後援
 山田幸世脚色原田作
 和川幸世脚色原田作
 朝日新聞社出版

八四場幕

② かさね色彩間苺豆
木下川
 堀の場
 興右衛門
 清元梅吉社中

③ 十五年目の女房
長谷川伸作
 平田隴三郎演出
 八二場幕

日曜・マチネー 正午開演

御観劇料
 特等席 三圓
 一等椅子席 二圓五十錢
 二等席 一圓五十錢
 三等席 一圓
 四等席 五十錢
(他に各等入場統一圓)

どうとんぼり 中座



ほん
どう
本朝廿四孝
かう

十種香の段
狐火の段

十種香の段

この淨瑠璃は武田上杉の確執に足利將軍を殺した齋藤道三の謀叛を取合せた作で近松の「信州川中島合戦」等を藍本として更に趣向を立て技巧を凝してゐる。近松半二、三好松洛等の合作で明和三年正月竹本座初演

(床本) 十種香の段

十種香から狐火までの件りは全曲五段の中、四段目の切に當り、この段に織込まれたところは、上杉武田兩家和睦の爲とて義晴の後室手弱女御前が勝頼と八重垣姫とを許嫁にした。最後には道三が滅亡し、勝頼八重垣姫は芽出度く夫婦になるが十種香の場の勝頼は實の勝頼で先に切腹したのは花造りの簀作であつた。濡

衣は簀作と通じてゐたが濡衣は齋藤道三の娘であり、道三は菊造りの關兵衛で上杉へ忍び勝頼も亦花作りとなつて上杉へ忍び入つてゐた。狐火の水渡りの事は支那西湖の故事であるのを諏訪湖へ持つて來たものである。

人形

原	小文治	吉田文之助
白須賀六郎	吉田玉徳	
長尾謙信	吉田玉市	
こし元濡衣	桐竹紋太郎	
娘	八重垣姫	桐竹紋十郎
武田勝頼	吉田玉幸	

娘	八重垣姫	竹本南部太夫
武田勝頼	竹本織太夫	
こし元濡衣	竹本相生太夫	
長尾謙信	豊竹伊勢太夫	
白須賀六郎	豊竹辰太夫	
原	小文治	竹本播路太夫
		鶴澤重造

られぬを幸ひに、花作りとなつて入り込みしは、幼君の御身の上に、若し過ちやあらんかと、餘所ながら守護する某それと悟つてかゝへしや、ハテ合點の行かぬとさしうつむき、思案にふさがると一問には、館の娘八重垣姫許嫁ある勝頼の、切腹ありし其の日より。一ト問所に引き籠り

床に繪姿かけまくも、御經讀誦の鈴の音、こなたも同じ松虫の、鳴く音に袖も濡衣が、今日命日の弔ひの、位牌に向ひ手を合せ、詞廣い世界に誰あつて、お前の忌日命日を、弔ふ人も情けなや父御の悪事も露知らずお果てなされたお心を、思ひ出す程おいとしい、嗚や未來は迷ふてござらう、女房の濡衣が、心ばかりの此の手向、千部萬部のお經ぞと、思ふて成佛して下さんせ、南無阿彌陀佛

樂しみは、繪像の傍で十種香の、煙も香花となりたるか、回向せうとてお姿を、繪にはかゝしはせぬものをたましひかへす反魂香名畫の力もあるならば、可愛とたつた一ト言の、お聲も聞きたい聞きたいと、繪像の傍に身を打ちふし、流涕こがれ見え給ふ、詞あの泣き聲は八重垣姫よな我名を呼びし勝頼を、誠の夫と思ひ込み、弔ふ姫と弔ふ濡衣、不愍ともいぢらしとも、云はん方なき二人が心と、そゞる涙にくれけるが、詞ア、我ながら不覺の涙と襟かき合せ立ち上る、後にしよんぼり濡衣が、詞申し装作様、合點のゆかぬはあなたのお姿、どうした事で此のやうに。オ、不審尤も、はからずも謙信に、かゝへられたる衣服大小。テモ扱も衣紋付きなら上下の召し様まで、似たとはおろか矢張り其のまゝ、かた

みこそ今は仇なれこれなくば、忘るゝ事もありなんと、讀みしは別れを悲しむ歌、かたみさへぢやに我が夫に、みぢん變らぬ此のお姿、見るにつけても忘れぬ、詞私や輪廻に、迷ふたそうな、御ゆるされてと伏し沈む、泣聲もれて一間には、不審立ち聞く八重垣姫、そつと襖の隙間も姿見紛ふ方もなく、ヤア我が妻か勝頼様と飛び立つ心を押し沈め、正しうお果てなされしもの、似たと思ふは心の迷ひ繪像の手前も恥しと立ち戻つて手を合せ、御經讀誦の鈴の音。勝頼公は濡衣が心を察して聲曇り、詞はかなき女の心から、歎くは理はり去りながら、定めなき世と諦めよと、諫むる詞こなたには、心空なる其の人の、若しやながらへおはすかと、思へば戀しくなつかしく、又覗いては繪姿に、見比べるほど生

寫し、似はせて矢張りほんゝの、
勝頼様ぢやないかいのと、思はず一
ト間を走り出で、縫り付いて泣き給
へば、はつと思へどさあらぬ風情、
詞こは思ひ寄ざる御仰せ我等義作と
申す花作、漸々只今召しかゝへられ
衣服大小改めし新參者、勝頼とは覺
えなし、御廬相あるなど突放せば、
詞ム、何んと云やる、今父上にかゝ
へられし新參者、花作の義作とや、
自からとした事が、餘りよう似た面
ざしの、もしやそれかと心の煩惱、
二人の手前恥しながら、詞コレ濡衣
此の義作とやら云ふ人を、そなたは
疾うから近付きか。エイ、いやいの
知る人であらうがの。アノお姫様と
した事が、たつた今見えたお人、な
んのまあ私が。イヤ隠しやんな今の
素振り忍ぶ戀路といふやうな可愛ら
しい仲かいのと、思ひもよらぬ詞に

詞オ、お姫様の仰有る事わいの
人にこそよれ、なんのあなたに勿體
ないと云やるからは、どうでもそな
たのしめるべの人か。イ、エ、さうで
はなけれ共、大事のお主の目をかす
め、忍び男を拵へるは勿體ないと申
す事で御在ります。ム、すりやする
べの人でなく、殿御でもない人なら
どうぞ今から自らを、可愛がつてた
もる様、押し付けながら媒を、頼む
は濡衣さま〜と、夕日まばゆく顔
に袖、あでやかなりし其の風情、詞
オ、お姫様とした事がまだお子達と
思ひの外、大それたあの義作殿を。
サア見染めたが戀路の始め、後とも
云はず今爰で、媒せいと仰有るのか
我折れ、ほんに大名のお娘御とて、
油断はならぬ戀のみち、品によつた
らお取り持ちいたしませうが。コレ
〜濡衣、必らず廬相云ふまいぞ。

サア何もかも私が呑み込んで、ナ、
呑み込んでお取り持ちすまい物でも
ないが、眞實底から義作殿に御執心
でござりますか、と問はれて猶もあ
からむ顔。勤めする身はいざしらず
姫御前のあられもない、殿御に惚れ
たと云ふ事が、嘘、偽りに云はれう
か、詞其のお詞に違ひなくば、何ぞ
慥な誓紙の證據、それ見た上でお媒
オ、それこそ心易い事、其の誓紙さ
へ書いたらば、詞イエ〜夫もこつ
ちに望みがある、私が望む誓紙と云
ふは、諏訪法性の御兜、それが盗ん
で貰ひたい。ヤア何と云やる、諏訪
法性の御兜を、盗み出せと云やるの
は、扱てはあなたが勝頼様、と云ふ
口押へて、詞ハテ滅相な勝頼呼ばは
り、みちん覺えのない義作、廬忽ば
しのたまふなと、云ふ顔つれ〜打
ち守り。許嫁計りにて枕交さぬ妹香

中、おつゝみあるは無理ならねど、同じ羽色の鳥つばき、人目にそれと分らねど親と呼び又つま鳥と呼ぶは生あるならひぞや、いかにお顔が似ればとて、戀しと思ふ勝頼様、そも見紛うてあられうか、世にも人にも忍ぶなる、御身の上と云乍ら、連れ添ふ私に何に遠慮、つかう〜と御身の上、明して得心さしてたべ、それも叶はぬ事ならば、いつそ殺して〜と縫り付いたる恨み泣き、勝頼わざと聲あらゝげ、詞ヤア聞きわけなきたはふれ事、いかほどにのたまふとも、覺えなき身は下司下郎、餘所の見る目もはゞかりあり、そこ退き給へと突き放せば、詞スリヤ何の様に申しても、勝頼様ではおはさぬか、ハア、はつとばかりに蓑作が、差し添へ逆手に取給へば、こは御短慮と止むる濡衣、詞イヤ〜放

して殺したも、勝頼様でもない人に、戯れ事の恥かしや、心の穢れ繪像へ言ひ譯、どうも生きては居られぬと、又取り直すを猶も押し留め詞オ、遠は武家のお姫様天晴なるお志し、其のお心見るからは、勝頼様に逢はせませう、ソレ、そこにござる蓑作様が、御推量に違はず、あれが誠の勝頼様、ちやつとおあひなされませと、突きやられてはさすがにも、始の恨み百分一、聞えませぬが精一ばい、後は互ひに抱き付き、つゝ濡初に、濡衣も、心どきつく折柄に、父謙信の聲として、詞蓑作は何れに居る。塩尻への返答、時刻移ると立ち出れば、はつと蓑作飛びしさり、詞御支度よくば直ぐ様參上。ホ、委細の事は此の文箱に、返事も早く罷り越せ、はつと領掌文箱携へ、塩尻さして急ぎ行く。謙信後を見送

つて、詞ヤア〜者共、用意よくば早來れと、仰せにはつと白須賀六郎原小文治、更科などの譜代の郎黨御前にすゝめば謙信勇んで、詞今此の諏訪の湖に、氷閉れば渡海は叶はず塩尻迄は陸路の切所、油斷して不覺を取るな、ハア畏り奉ると、勇み進んでかけりゆく。後に不審は八重垣姫、申し父上、こと〜しい今の有様、何事やらんと尋れば。詞ホ、あれこそは、武田勝頼討手の人数、何に勝頼様を討手とは、コハそもいかに何故と驚く二人をはつたと睨め付詞諏訪法性の兜を盗み出さんうぬらが巧み、物かげにて聞いたる故、勝頼に使者を云ひ付け、歸りを待つて討ち取らさんと、牒合はせる討手の手配エイそんなら今の討手の者は、勝頼様を殺さん爲か、ハアはつとばかりにどうと伏し

狐火の段

竹本伊達太夫

鶴澤友衛門

レツ (豊澤團伊三)

豊澤新太郎

琴 鶴澤友三郎

人形

娘

八重垣姫

桐竹紋十郎

今日は如何なる事なれば、過ぎ去り給ひし我夫に再び逢ふは優曇華と、悦んで居たものを、又も別れになる事は、何の因果ぞ情けなや、父のお慈悲にお命を、どうぞ助けて給はれと、口説き歎くに目もやらず、詞ヤア武田方の廻し者、憎き女と濡衣引きたてうぬには尋ねる仔細あり、奥へ失せうと小腕とり、情け用捨もあら氣の大將、帳臺深く入り給ふ。

(床本) 狐火の段

思ひにや、焦れてもゆる、野邊の狐火小夜ふけて、狐火や、狐火野邊の野邊の狐火さよふけて、幾重もれくる爪音は、君をもうけの奥御殿、こなたは正體涙ながら、詞アレあの奥の間で檢校が、諷ふ唱歌も今身の上、おいとしは勝頼様、かゝる巧みのあるぞとも、知らずはからぬ御

身の上、別れとなるもつれない父上諫めても、歎いても、聞き入れもなき胴慾心、娘不愠と思すなら、お命助けて添はせてたべと、身を打ち伏して歎きしが、詞イヤ、泣いてゐられぬ所、追手の者より先へ廻り勝頼様に此の事を、お知らせ申すが近道の、諏訪の湖船人に渡り頼まん急がんと、小棧取る手も甲斐くくしく、かけ出せしが、イヤくく、詞、今湖に氷張り詰め、船の往來も叶はぬよし、歩路を行ては女の足、なんと追手に追つかれう、知らすにも知らされず、みすく、夫を見殺しにするは、いかなる身の因果詞ア、翹がほしい、羽がほしい、とんで行きたい、知らせたい逢ひたい見たいと夫戀ひの、千々に亂るゝ憂き思ひ、千年百年泣きあかし、涙に命絶ゆればとて、夫の爲めにはよも

なるまじ、此の上頼むは神佛と、床に祭りし法性の兜の前に手をつかへ
 詞此の御兜は諏訪大明神より武田家へ、授け給はる御寶なれば、取りも直さず諏訪の御神、勝頼様の今の御難儀、助け給へ救ひ給へと、兜を取つて押し頂き、押頂きし俤の、もしやは人の咎んと窺ひ下りる飛び石傳ひ、庭の溜の泉水に、うつる月影怪しき姿、はつと驚き飛び退しが、

明月、不思議に胸もにぎり江の池の汀にすつくりと、眺め入つて立ちたりしが、詞誠や當國諏訪明神は、狐をもつてつかはしめと聞きつるが、明神の神體に等しき兜なれば、八百八狐つき添ひて、守護する奇瑞に疑ひなし、合オ、それよ思ひ出したり湖に氷張り詰むれば、渡り初する神の狐、其の足跡をしるべにて、心安う行きこう人馬、狐渡らぬ其先に渡れば水に溺るとは、人も知つたる諏訪の湖たとへ狐は渡らずとも、夫を思ふ念力に神の力の加はる兜、勝頼様に返へせとある、諏訪明神の御教へハア、忝けや有難やと、兜を取つて頭にかづけば、合忽ち姿狐火のこゝにも燃へ立ち合がしこにも合亂るゝ姿は法性の、兜を守護する不思議の有様、諏訪の湖歩ち渡り甲斐と越後の兩將と其名も今に残しける。

籠寅特選
まんざい大會

十月一日初日
 毎日正午開演

—演實—
 ちよんまげ
 シヨウウ

—畫映—
 讀賣・パター
 ニューズ上映

階下席 四十錢

どうとんぼり
浪花座



妹脊山婦女庭訓
いもせやまなんなていきん

道行戀の小田卷

道行戀の小田卷

お 求 橘
み 女 姫
わ 女 姫
豊竹呂太夫
豊竹和泉太夫
竹本源太夫
竹本文太夫
竹本さの太夫
竹本相瀨太夫
竹本英太夫
竹本土佐太夫
竹本越名太夫
豊澤新左衛門
鶴澤彌叶
野澤吉
鶴澤寛
野澤八造
鶴澤鶴太郎
鶴澤友太郎
鳥澤友衛門
鶴澤一郎右衛門
豊澤仙系

この道行は妹脊山の四段目奥の次で書下しは明和八年正月で近松半二、三好松洛等の作の一つで、初演の時は春太夫、梶太夫、和太夫等が語つてゐます。この段の模様を申し上げますと、求女の風雅な姿に戀ひ焦れて入鹿の娘橘姫と杉酒屋の娘お三輪がその後を追ひます、二人して思ふ男を争ひますが求女は腹に一物あり橘姫の裾に緒環の糸をつけ、お三輪はまた求女に緒環の糸を結びます、その戀の緒環をたぐり／＼行きついたのは一代の榮華を極めた入鹿大臣の三笠山の御殿であります。橘姫と淡海が祝言の手拍手が奥から聞えるのをお三輪は氣も狂はん許り、鱈七は

お三輪を凝著の相ある女と見てとつてたゞ一突きに刺します。お三輪はその生血が戀人の役に立つと聞いて満足を死んでゆくといふ筋合の一齣である。

(床本) 道行戀の小田卷

常闇の夜々毎に通ひては又歸るさの道もせきもせそれも何故戀故にやつるゝ所體はづかしと佛隠す薄衣につゝめど薰り橘姫、思はぬ人を思ひ詫心のたけをくどけどもつれなき松の下紅葉こがれてたへんたまのをも殿故ならば捨草も暫しはいかふ芝村の賤の男が置手拭で忍び忍びの出あいづま晩にござらばナコレのんやほんにさ春戸の柿の木の枝こへて連理を契る言の葉はそれも戀中爰はまた箸中村よ一もつの長者が後と名にひゞく釜が口をも出放れてあゆむに

人形

橘 姫 吉田榮三郎

求 女 桐竹政龜

お み わ 吉田文五郎

くらきくれ竹のしげれる中を分行け
 ば葉毎の露がほろ／＼とほろ／＼打な
 る雉子の聲思ひくらべていとゞ猶心
 細野に立つくすにくやかゞしにおど
 さるゝわれが姿に又おぢてはつと立
 行羽風につれてちり／＼ちるや柳本
 流るゝ水に裾ぬれて物思へとや帯と
 けの里羨し自はついに一度の情さへ
 ないて身をしる涙雨ふるの社の御燈
 の影か松の木の間にもち／＼ちちと見へ
 つ隠れつ歸るさの後を求女がしたひ
 來て互にはたと行合の星の光りに顔
 と顔ヤア戀人か何故に爰迄後を追鳥
 はもしや埒の契りをも叶へてやると
 のお心かと胸にはいへど詞には面は
 ゆぶりの袖几帳なるほどせつなる心
 ざし仇に思はじさりながらさほどこ
 がるゝ戀路にて晝をば何とうば玉の
 夜斗りなる通ひ路はいとふしんなり
 名所を聞いたる上はこなたより二世
 のかためは願ふ事明させ賜へとひた
 すらに間はれて實にも恥かしのもつ
 て餘れる憂身の上語るにつらき葛城
 の嶺の白雲有ぞともさだかならざる
 賤の女と思ふて深い疑ひの雲を晴し
 て自が思ひも晴らして賜はらばどん
 な仰も背くまいたとへ草葉の露霜と
 消ても何のいとやせぬこれ程思ふに
 胴慾なとけぬお前のお心は餘りむす
 ぶの神様を祈り過したとがめかやつ
 れなの君やと恨詔思ひ亂るゝ薄かげ
 それとお三輪は走り寄り中を隔てゝ
 立柳立退く袂引とゞめエ、聞へませ
 ぬ求女様ソリヤ氣の多い悪性なそも
 や二人が馴れ初めは始めて三輪の過
 し夜に葉ごしの月の儂はお公家様や
 ら侍様やらしれぬ形ふりすつきりと
 水際の立よい男外の女は禁制としめ
 てかためし肌と肌主ある人をば大膽
 な斷りなしに惚るとはどんな本にも

ありやせまい女庭訓躰方よふ見やし
 やんせエ嗜みなされ女中様イヤそも
 じ連たかちねのゆるせし中でもない
 からは戀は仕がちよ我殿様イ、ヤわ
 たしがイヤわしがとゝのに縫りつ手
 を取つて園に色よく咲草時は男女に
 なぞらへいは言はれふ物か夕顔の
 梅はものゝふ櫻は公家よ山吹は傾城
 杜若は女房よいろは似たりや菖蒲は
 めかけ牡丹は奥方よ桐は御主殿姫百
 合は娘ざかりとなでしこのサアなる
 ぞへゝゝなるとならずとなら坂や兒
 手柏てふしの二人の女にらめばにらむ萩と
 萩中にもたるゝ男べし放ちはやらじ
 と縫り付きこなたが引けばあなたと
 とゞめ戀の柵しち葛くわ付きまとはれてく
 るゝゝ廻るや三つの小車の花よ
 りしらむ横雲のたなびき渡りあり
 〳と三笠の山も程近く鳴る鐘の音
 におどろく姫歸る所はいづくぞと求

女が氣轉振り袖の端にぬふてふ取り
 かはず縁のおだ卷いとしさの餘つて
 三輪も悋氣の針男の裾に付ける共し
 らずしるしの糸筋をしたひしたふて



湯

十月の大歌舞伎

十月一日初日

毎日午後三時開幕

第一 日柳 雨の鞘橋
郷田 感作 鈴木英輔演出 松田種次装置

第二 淨瑠璃 三人片輪
三幕 常盤津文学太夫社中

第三 双蝶々 曲輪日記
八橋の里 引まごの場

第四 富十郎 葛の葉さんげ
巖谷三一 原作 大西利夫 脚色 食瀧南北 衣裳考案

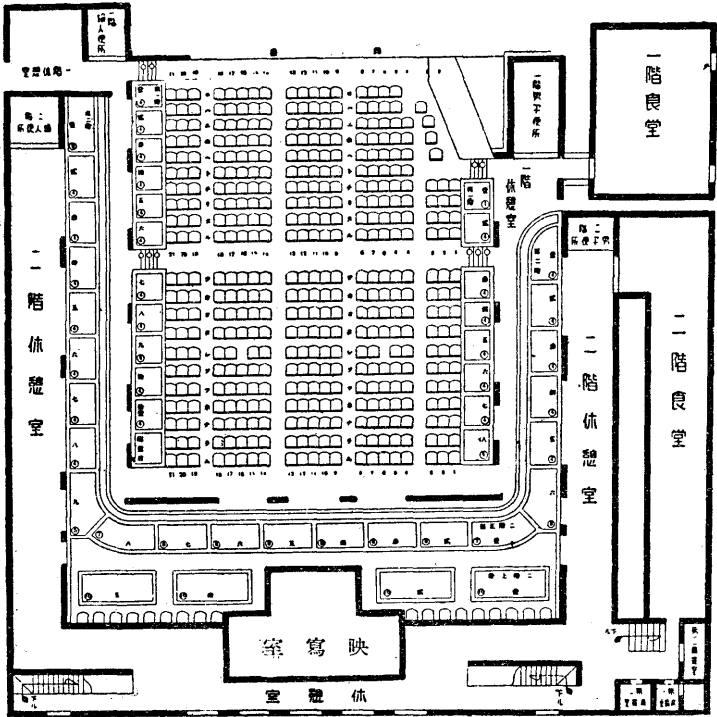
第五 上夕 辰 駕立
二幕 七場

御観劇料

櫻席 六十錢
 菊席 八十錢
 一等席 一圓五十錢
 二等席 二圓
 三等席 四圓五十錢
(他各等入場統一圓)

大阪 歌舞伎座

内案御席場御座樂文



御・觀・覽・席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前・賣・切・符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御命の節お呼出しの電話は
南四七壹壹番で御座ります

切・符・賣・場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります
二・等・席・三・等・席切符は當日正面入口にて發賣致します

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は 嘗に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に反かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尚御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座います。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますから成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ます。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座居ます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座居ます。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座居ます

お出口は 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號人マークを付けて居りますから御用の節は御申付け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めしますから豫め御承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として

案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じよう、御案内申上ける事に致しました。御一報次第参上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

支配人 下村清次郎

文樂座

大阪市南區久左衛門町八

松竹株式會社大阪支店内

編輯兼 鳥江鏡也

發行所 永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目十二

昭和十四年九月卅日印刷

昭和十四年十月一日發行

發行所 松竹株式會社大阪支店

文樂座南一食堂

御食事の御用は一幕前に御下命賜
はれば至極便利御座すまい

大坂四ツ橋

南温泉料理

御宴會にも
御家族連にも

電話南

75

一	一	一	一	七
三	二	二	二	〇
二	二	三	三	一
四	三	二	一	一
番	番	番	番	番

